

八日市場市小高遺跡

1 9 9 1

千葉県土木部
財団法人 千葉県文化財センター

八 日 市 場 市 小 ^お ^{だか} 高 遺 跡

—主要地方道多古笹本線事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ—

1 9 9 1

千 葉 県 土 木 部
財団法人 千葉県文化財センター

序 文

千葉県北東部に位置する八日市場市は、太平洋に面し、東には九十九里浜、北には北総台地が広がっています。この九十九里低地や台地上には、恵まれた自然環境のもとに数多くの遺跡が所在しています。

一方、千葉県においては、近年の交通量の増加に伴い、円滑で安全な交通を確保するため、道路網の整備が急務となっているところです。そこで、千葉県土木部では、その一環として、新東京国際空港の南側に位置する多古町と遠洋漁業基地として知られる鏡子市とを結ぶ主要地方道多古笹本線の建設を計画し、八日市場市小高地先において道路の拡幅工事を実施することになりました。

このため、千葉県教育委員会では、道路予定地内に所在する埋蔵文化財の取扱いについて、千葉県土木部、八日市場土木事務所と慎重に協議を重ねた結果、発掘調査による記録保存の措置を講ずることで協議が整いました。

発掘調査は、財団法人千葉県文化財センターが千葉県土木部の委託を受け、千葉県教育委員会の指導のもとに昭和61、62年度の二度にわたって実施しました。

その結果、平安時代の竪穴住居跡8軒を始めとして、旧石器時代から中世・近世に至るまでの資料を得ることができ、また、各時代にわたる大規模な複合遺跡であることが明らかになりました。

この度、整理作業が終了し、報告書として刊行する運びとなりました。発掘調査による成果は、北総台地の歴史の解明に貴重な資料となるものと思われます。本書が学術的な資料としてはもとより、多くの方々が郷土の歴史に対する理解を深めるためにも広く活用されることを願ってやみません。

最後に、千葉県土木部、八日市場土木事務所、千葉県教育委員会、八日市場市教育委員会、地元関係者の御協力、御指導に深くお礼申し上げるとともに、調査に協力された調査補助員の皆様に対して、心から謝意を表します。

平成3年3月

財団法人千葉県文化財センター
理事長 岩 瀬 良 三

凡 例

1. 本書は、八日市場市小高355-1他に所在する小高遺跡（遺跡コード214-001）の発掘調査報告書である。
2. 調査は、主要地方道多古笹本線建設に伴う事前調査として、千葉県教育委員会の指導のもとに、千葉県土木部との委託契約に基づいて、財団法人千葉県文化財センターが実施した。
3. 発掘調査は、昭和61年4月14日から同年5月30日及び昭和62年4月1日から同年6月30日の2か年、延べ5か月にわたって実施した。担当者は下記のとおりである。
昭和61年度 調査部長 鈴木道之助、部長補佐 岡川宏道、班長 高橋賢一、
調査研究員 海老原 充
昭和62年度 調査部長 堀部昭夫、部長補佐 古内 茂、班長 矢戸三男、
主任調査研究員 宮 重行、調査研究員 田島 新
4. 整理作業は、昭和64年1月1日から平成元年3月31日、平成2年1月1日から同年3月31日の2か年、延べ6か月にわたって調査部長堀部昭夫、部長補佐岡川宏道・阪田正一、班長矢戸三男・藤崎芳樹の指導のもとに鳴田が実施した。なお、旧石器時代の遺構、遺物については技師新田浩三、縄文時代の遺物については技師石橋宏克が執筆した。
昭和63年度 調査部長 堀部昭夫、部長補佐 岡川宏道、班長 矢戸三男、
主任調査研究員 鳴田浩司
平成元年度 調査部長 堀部昭夫、部長補佐 阪田正一、班長 藤崎芳樹、
主任技師 鳴田浩司
5. 本書で使用した地形図は、国土地理院発行の50,000分の1地形図（成田・八日市場）、八日市場市発行の都市計画図（2,500分1）、及び陸軍迅速図（20,000分1）である。なお、本書に使用した方位はすべて平面直角座標第IX系による。また、本書で使用した航空写真は、京葉測量（株）撮影のコース番号（c17-58）・1987年度撮影のものを使用した。
6. 調査の実施及び本書をまとめるに当り、下記の方々より御指導、御協力を賜りました。各々記して謝意を表します。（敬称略）
千葉県教育庁文化課、千葉県土木部道路建設課、千葉県八日市場土木事務所、八日市場市教育委員会、斎木 勝、福岡 元、藤崎宏道

目 次

序文

凡例

I 調査に至る経緯	1
II 遺跡の位置と地理的環境	1
III 周辺の遺跡と歴史的環境	2
IV 調査の概要	4
V 遺構・遺物	6
1. 旧石器時代	6
2. 縄文時代	8
3. 平安時代	18
4. 中世・近世以降	30
5. その他の遺物	38
VI まとめ	47

挿 図 目 次

第1図 小高遺跡の位置	1
第2図 小高遺跡と周辺の遺跡(1/50,000)	3
第3図 遺跡周辺地形図、グリッド配置図(1/5,000)	5
第4図 基本層序及び旧石器遺物分布図	7
第5図 旧石器Ⅶ層出土石器	8
第6図 014・015・023・024・027土坑実測図	10
第7図 023土坑出土石器	12
第8図 024土坑出土石器	13
第9図 グリッド出土縄文土器(1)	14
第10図 グリッド出土縄文土器(2)	15
第11図 グリッド出土縄文土製品	17
第12図 グリッド出土石器	17
第13図 012・013竪穴住居、カマド実測図	19
第14図 012竪穴住居出土遺物実測図	20

第15図	013竪穴住居出土遺物実測図	21
第16図	017竪穴住居実測図	22
第17図	018・019竪穴住居、カマド実測図	23
第18図	018竪穴住居出土遺物実測図	24
第19図	020竪穴住居、カマド実測図	26
第20図	022・022A竪穴住居実測図	27
第21図	022竪穴住居カマド実測図	28
第22図	020・022竪穴住居出土遺物実測図	29
第23図	002・005土坑実測図	31
第24図	001・003・004溝実測図	32
第25図	003溝出土遺物実測図	33
第26図	016・021・025・026・028溝実測図	34
第27図	011・030塚実測図	37
第28図	グリッド出土及び表採遺物(1)	39
第29図	トレンチ、グリッド出土及び表採遺物(2)	40
第30図	銭貨拓影図	42
第31図	遺跡周辺図(明治16年参謀本部陸軍部測量局作成)	48
第32図	遺構配置図(1)	51
第33図	遺構配置図(2)	53

表 目 次

表1	銭貨計測表	41
表2	012竪穴住居出土遺物観察表	43
表3	013竪穴住居出土遺物観察表	43
表4	018竪穴住居出土遺物観察表	44
表5	020竪穴住居出土遺物観察表	44
表6	022竪穴住居出土遺物観察表	45
表7	グリッド出土・表採遺物観察表	46

図版目次

- 図版1 小高遺跡周辺航空写真(1/10,000)
- 図版2 調査前、確認調査状況
- 図版3 014・015土坑
- 図版4 024・027土坑、028溝
- 図版5 012・013・017・018・019竪穴住居
- 図版6 020・022竪穴住居
- 図版7 003溝
- 図版8 002・005・023土坑、001・004・025・026溝
- 図版9 011塚
- 図版10 030塚
- 図版11 旧石器時代石器・縄文時代石器
- 図版12 023土坑出土土器
- 図版13 024土坑出土土器
- 図版14 グリッド出土縄文土器
- 図版15 グリッド出土縄文土器・土製品
- 図版16 012・013・018竪穴住居出土遺物
- 図版17 018竪穴住居出土遺物
- 図版18 020・022竪穴住居出土遺物
- 図版19 グリッド出土・表採遺物
- 図版20 中世・近世遺物
- 図版21 近世以降の遺物

I 調査に至る経緯

多古笹本線は香取郡多古町を起点とし、八日市場市、干潟町を通過し鏡子市笹本を終点とする総延長16.91kmの主要地方道である。現状では、全般にわたって道路が狭隘で、屈曲が多く近年の交通事情の変化に対応することが難しいために道路の整備が急がれてきている。そこで千葉県土木部では、道路整備事業の一環として、今回八日市場市小高地先の道路拡幅工事を計画した。これに伴い土木部から千葉県教育庁文化課に予定地内の「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」の照会があり、文化課で現地踏査を実施したところ、縄文土器・土器器散布地、塚2基が所在することを確認し、土木部宛その旨を回答した。

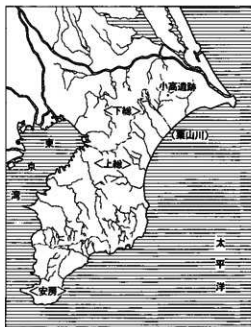
その後、事業の性格上現状で遺跡を保存することが難しいため、やむなく記録保存の措置を講ずることで千葉県教育委員会と千葉県土木部との間で協議が整い、財団法人千葉県文化財センターが発掘調査を担当することとなった。

II 遺跡の位置と地理的環境

小高遺跡は千葉県八日市場市小高に所在する。八日市場市は千葉県でも東寄りの太平洋に面した市で、東は旭市、干潟町、北は多古町、栗源町、西は光町、南は野栄町に接している。市街地はJ R東日本総武線八日市場駅及び国道126号線に沿って形成されており、周辺には広範な農村地帯が広がる。八日市場市の地形は大きく海岸平野部と北総台地部に二分される。

海岸平野部は現在では水田地帯となっているが、潟湖が発達しており南東側は古くは槽海と呼ばれ周囲40km、深さ1.5～4 mの広大な潟湖があったが、近世に干拓され現在に至っている。また海岸線平野部では砂丘列が海岸線に平行して幾列にも並び、現在ではその上に集落や道路が発達している。北総台地部は南及び北側から借当川をはじめとする栗山川の支流によって複雑に開析されており、谷津及び谷津田が発達している。

小高遺跡は北総台地上の標高38m地点に位置し、小河川によって開析が著しく進み、さ



第1図 小高遺跡の位置

ながらリアス式海岸のように谷津が入り込んでいる。遺跡は台地全体に広がっているが、台地は西及び東側で南北から入り込んでくる谷津によって狭められている。小高地区の集落は台地の北側縁辺に発達し、現在その両側の台地の多くは畑地として利用されている。多古笹本線は台地の東西の尾根を結んで畑地の中を横切っている。

Ⅲ 周辺の遺跡と歴史的環境

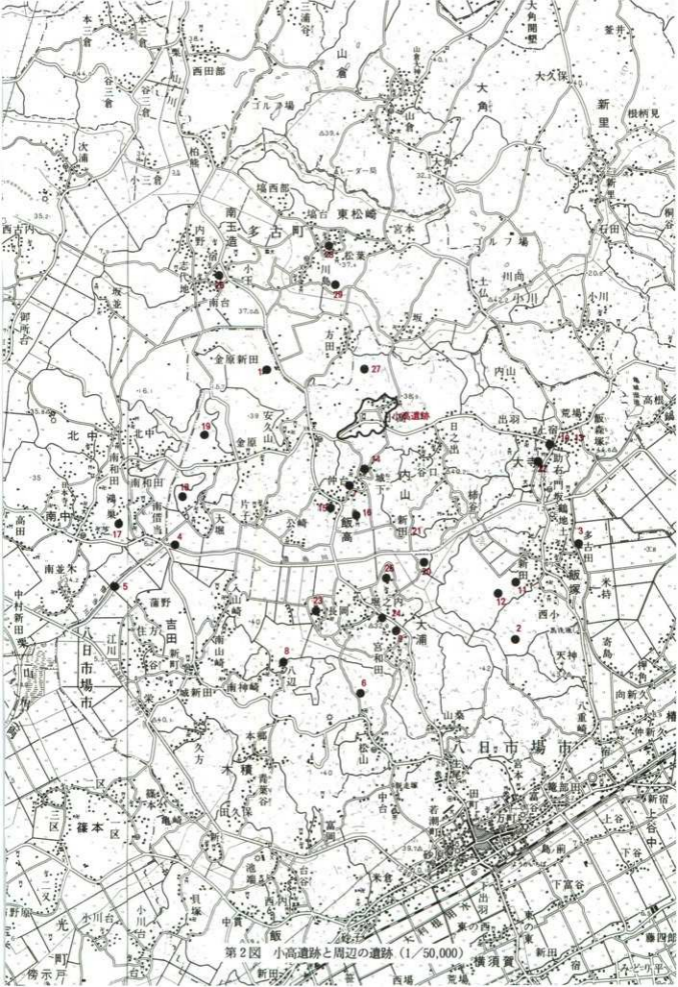
特に今回の調査では旧石器、縄文、平安、中・近世の各時代の遺構が検出しているので、これらの時代を中心に、周辺の遺跡と小高遺跡の歴史的環境を概観してみたい。

旧石器時代では安久山遺跡(1)、飯倉鈴歌遺跡、飯塚遺跡群小山遺跡(2)などがあるが、この地域では調査例が少なく、調査面積も少ないことから資料的に乏しいのが実情である。

縄文時代の遺跡には比較的著名なものとして、低湿地遺跡では、晩期の土器、木製品を出土した多古田遺跡(3)、後期の加曾利B式土器を出土した借当川矢摺泥炭遺跡(4)、宮田下泥炭遺跡(5)などをはじめとする借当川流域の遺跡群、台地上では早期の松山貝塚(6)、前期の飯高貝塚(7)、中期の八辺貝塚(8)、中期・後期の大浦貝塚(9)、大寺遺跡(10)ほか前期から晩期の遺物を出土した飯塚遺跡群覆谷遺跡(11)などが挙げられる。しかし、遺跡全体を調査した資料がほとんど無く、さらに調査成果がすべて発表されていないので資料的には乏しいものとなっている。

平安時代には現在の栗山川が下総国と上総国の境界になっていた。小高遺跡は匝瑳郡に含まれ、地理的には下総・上総両国境に位置する。倭名類聚抄によれば、当遺跡とほぼ同時期、即ち、9世紀前半から10世紀にかけて匝瑳郡は18郷からなり、当時、小高地先は下総国匝瑳郡玉造郷に含まれていた(下総国旧事考)。平安時代の代表的な遺跡としては、「千校尉」・「庁原」・「庁」の墨書土器、青銅印、和同開宝を出土した柳台遺跡(12)を含む飯塚遺跡群、大寺遺跡(10)、下総龍角寺と同系統の軒丸瓦を出土した大寺廃寺(13)、「郡厨」と読める墨書が出土して「厨家」として注目された、海岸平野部の微高地に立地する平木遺跡(14)などが挙げられる。

12世紀末以降中世を通じて当地は千葉氏とその一族によって支配されたが、この12世紀には小高周辺は千田庄の一部として中世的支配体制に移行していったようである。以後南北朝とその後の幾つかの内乱を経て、16世紀末には三谷、井田、平山氏などの支配下になった模様である。中世の遺跡としては城郭が多数挙げられる。借当川流域右岸では平山氏の居城とされる飯高城(15)をはじめとして、新砦跡(16)、飯高砦跡(17)、新城(18)、大堀城(19)、金原砦(20)、内山城(21)、内山中城(22)、大寺城(23)が、また同左岸では長岡砦(24)、宮和田城(25)、大浦城(26)がある。栗山川支流左岸では新城(27)、ぬまかけ城(28)が、同右岸では飯倉城(29)、米倉城(30)などがある。その他中世城郭が著しく発達した地域であるが、文献資料がほとんどない地域であり、その年代、城



第2図 小高道跡と周辺の道跡 (1/50,000)

横須賀

主、性格等についてはほとんどわかっていない。

注1 千葉県八日市場市矢摺配炭遺跡発掘調査報告 1987 借当川遺跡調査会

注2 千葉県八日市場市宮田下泥炭遺跡 1985 借当川遺跡調査会

注3 千葉県八日市場市飯塚遺跡群発掘調査報告書 1986 八日市場土地改良事務所・八日市場市教育委員会

注4 注3に同じ

注5 大寺遺跡 1978 北総東部用水事業埋蔵文化財発掘調査団

注6 八日市場市大寺庵寺跡確認調査報告書 1990 財団法人千葉泉文化財センター

注7 八日市場市平木遺跡 1988 千葉県教育庁施設課・財団法人千葉泉文化財センター

注8 千葉県中近世城跡研究調査報告書第10集-惟津城跡・大堀城跡発掘調査報告書 1990 財団法人千葉県文化財センター

その他の遺跡についてはすべて「八日市場市史 上巻 (1982) によった。

IV 調査の概要

確認調査は昭和61年4月14日から実施した。道路の拡幅及び曲がりくねっている箇所を緩やかな曲線の道路に改修するというので、調査範囲は細長く既存の道路の両端に展開している。道路の交通量が多く、事故に会わないように細心の注意をはらいながらの調査であった。確認調査の対象面積は1,060㎡で、調査箇所が大きく3か所に分れるのでそれぞれを東から便宜的に1区、2区、3区と命名した。確認調査は上層128㎡、下層48㎡について5月30日に終了した。なお、確認調査と平行して検出遺構のみ拡張して本調査を実施した。その結果、2区で溝及び土坑がそれぞれ1基ずつ、3区では溝2条、土坑1基を検出した。したがって、遺構の本調査は確認調査範囲の中で終了したため、県教育委員会からの本調査範囲の決定については本調査不要の決定を受けた。

翌昭和62年4月1日から1・3区の残り及び4・5・6区の調査に入った。用地買収の関係で確認調査は2回に分けて実施した。確認調査の対象面積は2,140㎡で上層214㎡、下層86㎡について実施し、本調査範囲は上層730㎡、下層164㎡を決定し、本調査を実施した。そして前年同様遺構を検出した箇所を拡張して遺構の調査を実施した。その結果、旧石器時代の石器、縄文時代中期の土坑5基、平安時代の竪穴住居8軒、中・近世の溝5条を検出し、塚2基を含め、調査は6月30日に終了した。なお、5区は調査以前に植木畑として利用されていたため、攪乱が随所に認められた。

発掘調査に当たっては、まず、調査区全域を覆うように公共座標を基準とした大グリッド(40m×40mを1単位)を設定し、北から順にB、C、D、…の番号を付け、西から順に10、11、



第3図 遺跡周辺地形図・グリッド配置図 (1/5,000)

12、…の数字を付けた。また、大グリッドの1単位をさらに4 m×4 mの小グリッドに100分割し、00、01、02、…99の番号を付けた。遺構の実測及びグリッド出土の遺物の取り上げはこれを基準とした。なお、確認調査はトレンチ法で実施したが、本来であれば公共座標（グリッド）に合わせていれるべきところであるが、調査区が狭く細長い部分では任意の位置に設定したものである。出土遺物については、遺構・グリッド・トレンチの何れかで取り上げた。

V 遺構・遺物

昭和61年度の調査では、中世以降の溝状遺構3、土坑2と、それに伴い五輪塔水輪1、宝篋印塔相輪2、陶磁器、そして土師器片などが出土した。昭和62年度の調査では縄文時代の土坑5、平安時代の竪穴住居8、中世以降の溝5、塚2及び旧石器時代の遺物を検出した。それに伴い旧石器時代の石刃、剥片、縄文土器、土師器、須恵器、銭貨などが出土した。現場は道路脇で、道路建設時の攪乱があり、加えて調査幅が平均2～3 mと極めて狭いため、これを越える大形の遺構は全体を掘ることができなかった。

遺構番号は、調査に着手した順番に三桁の算用数字を付けた。昭和61年度は001から005まで、昭和62年度は011から030まで（029は欠番）である。従って、遺構番号順に並べた場合、遺構の種類はわからないが、当初の調査成果を尊重し、報告書も当初の遺構番号を踏襲することとした。以下に各時代ごとに遺構、遺物について記して、最終章で簡単にまとめてみたい。なお、遺構内の覆土から出土した遺物の内、明らかに遺構の時期に当てはまらないものについては、グリッド出土遺物として取り扱った。また、トレンチ出土遺物については、遺構に関係のあるものは遺構出土遺物と同様に取り扱った。遺物は最後に観察表としてまとめた。

1. 旧石器時代

基本層序（第4図）

I：暗褐色土 耕作土

II：暗褐色土

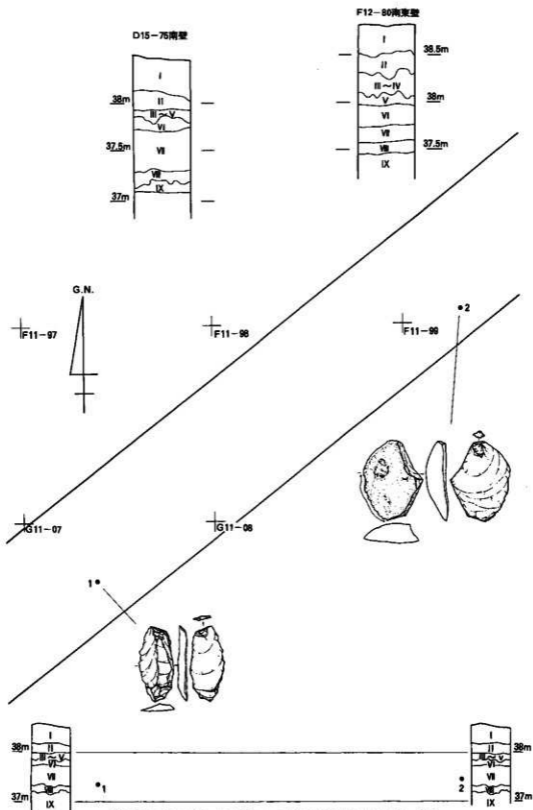
III：黄褐色軟質ローム いわゆるソフトローム層。VI層までソフト化した個所が多い。

IV：黄褐色硬質ローム いわゆるハードローム層。

V：暗黄褐色硬質ローム 第1黒色帯に相当する。IV層とV層の区分は不明瞭な部分が多い。

VI：黄褐色硬質ローム 火山ガラス（ATと思われる）を含み、乾くと白色でIII層とVI層との間でクラックを生じる。

VII：暗褐色硬質ローム 第2黒色帯に相当すると思われる（細分は不可能）。



第4図 基本層序 (1/40) 及び旧石器遺物分布図 (1/80)

Ⅷ：暗灰褐色硬質ローム Ⅷ層に比べ若干明色を呈するようだが、それほど明確に識別できない。

Ⅸ：暗灰褐色硬質ローム Ⅷ層に比べ若干粘性が強く、色調も暗い。

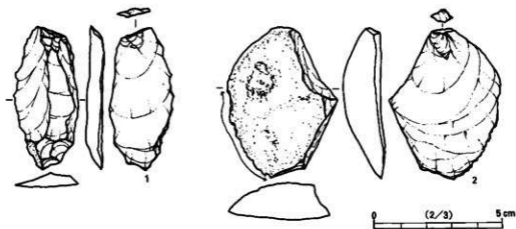
出土状況（第4図）

G11-07グリッド及びF11-89グリッドのⅧ層から、それぞれ単独で出土した。二つのグリッドを含む周辺を調査したが、他に遺物は出土しなかった。2点ともⅧ層から出土して、それほど離れていないので、同一文化層の遺物と思われる。Ⅷ層のやや下部から出土している。

出土遺物（第5図）

石器組成は、剥片（石刃）1点、使用痕のある剥片1点で、総計2点である。石材は2点とも安山岩である。

1は石刃である。末端部に主要剥離面と逆方向に石核調整をした後に、主要剥離面と同一方向に数回薄片を剥離している。頭部調整を行っているが、打面調整はない。2は使用痕のある剥片である。背面に大きく自然面を残す。



第5図 旧石器Ⅷ層出土石器

2. 縄文時代

縄文時代と考えられる遺構は土坑5基である。検出地点は大きく2か所に分れる。1か所は遺跡南西端で、もう1か所はグリッドで言うとE15-00の周辺、即ち小高遺跡でも西側に位置し、南北から谷が迫ってくる地点に近いやや広い平坦地あたりである。平安時代の竪穴住居の更に外側に分布する。そのうち023・024とした土坑より縄文時代中期末葉の加曾利EIV式土器がまとまって出土している。加曾利EIV式土器の他に縄文早期の土器片がわずかに出土しているものもあるがこれらは流れ込んだものと考えられる。遺構の検出されなかった地点についても、攪乱が多かったことを考慮すると、この結果は最小限の遺構の検出であったと考えたい。

(1) 014土坑

遺構（第6図）

グリッドでG10-69地点に位置する。既存の道路に近い部分で一部攪乱されている。規模は上端で95～102cm、下端で82～85cm、深さ75cmで、床面は平坦である。Ⅲ層下面で確認できた。時期は縄文時代早期と思われる。

遺物

無し。

(2) 015土坑

遺構（第6図）

グリッドでG10-68地点に位置する。南側の部分が一部攪乱されている。014土坑の南西2mのところにある。規模は上端で95～110cm、下端で80～90cm、深さ100cmで、床面は平坦である。Ⅱ層下面で確認できた。014と同様の時期・性格の土坑と考えられる。

遺物

無し。

(3) 023土坑

遺構（第6図）

グリッドでD15-91地点に位置する。規模は上端で140cm、下端で120cm、深さ70cmである。覆土は全体にハードロームブロックを含む均一な土層で、人為的埋没と考えられる。

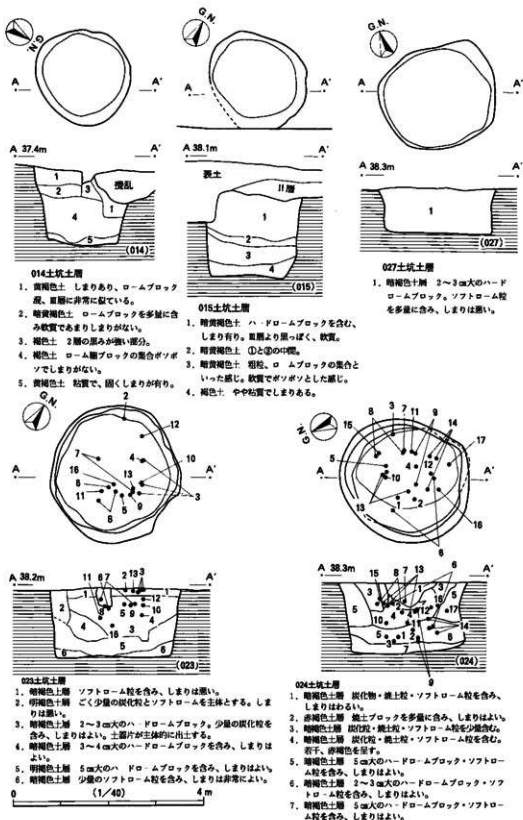
遺物（第7図1～16）

本土坑から縄文早期の土器片と中期末の土器片及び土製品が出土している。早期の土器は流れ込んだものと考えられ、本土坑は中期末の加曾利EⅣ式期のものと考えられる。

1・2は胎土に微量の植物繊維を含むもので表裏面共にナデ調整を行なう。田戸上層式土器から子母口式土器にかけての土器片と考えられる。

3～14は加曾利EⅣ式土器である。3～6は口縁部の破片である。3は口縁部が外反する深鉢形土器で、口縁部が無文となり、胴部と口縁部の境に隆帯を持つ。4～6は口縁部が内湾する深鉢形土器で、口縁部の無文帯が狭く、隆帯により無文帯と縄文帯を区画する。胴部には縄文を施文し、5の様に隆帯により逆U字文を施文するものもある。7～10は胴部の破片で、隆帯によるU字文や逆U字文の部分破片である。7は付加条縄文を施す。11・12は沈線によるU字文・逆U字文・曲線を施すもので、12の曲線文外は無文（磨消縄文）となる。13は縄文のみが施されるものである。14は無文の土器で、底部直上の破片と考えられる。無文土器と考えるより、むしろ底部付近の無文部の破片と考えられる。

15は土器片錘の破片である。周囲を丁寧に調整し、スリットを施す。16は土製円盤の破片である。無文の土器片を用い、周囲を円盤状に調整する。



第6図 014・015・023・024・027土坑実測図

(4) 024土坑

遺構 (第6図)

グリッドでD15-76地点に位置する。規模は上端で125~140cm、下端で105cm、深さ75cmである。覆土は全体に人為的埋没と考えられ、1~4層には炭化物粒、焼土粒、焼土ブロックが含まれ比較的大形の縄文土器の破片が見られる。また、5~7層は締まりが良くロームブロックを含む。

遺物 (第8図1~17)

本土坑より出土した土器は、全て加曾利EIV式土器に属するものである。1~6は口縁部の破片で、隆帯による文様を施す。1は口縁部が外反し、胴部で膨らみを持つ深鉢形土器である。口縁部直下は無文とし、胴部に縄文を字文として隆帯によるU字文・逆U字文を施す。2・3も同様であるが、無文帯と縄文帯の境に刺突文を巡らしている。4・5は口縁部が内湾する深鉢形土器と考えられ、無文部と縄文部の境に隆帯を巡らす。6は口縁部直下でく字状に屈曲する深鉢形土器で、胴部に縄文のみが施文される。7は無文部と縄文部の境に隆帯や沈線による明瞭な区画がなされないものである。8・9は隆帯によるU字文・逆U字文を施すものの胴部破片である。10は沈線による曲線文を描き、沈線内に縄文を施文する。11・12は胴部に条線を施す。13~16は胴部・底部の破片で、縄文が施文される。16は底部の破片で、底部直上は無文となり、ミガキによる調整がなされる。

17は土器片鏝である。周囲を長方形に調整し、長軸にスリットを施すものである。長径5.5cm、短径4.1cm、重さ24.5gを測る。

(5) 027土坑

遺構 (第6図)

グリッドでD15-65地点に位置する。規模は上端で125cm、下端で105cm、深さ45cmである。覆土は単一層で、2~3cmのハードローム・ソフトローム粒を多量に含む。人為的埋没と見られる。

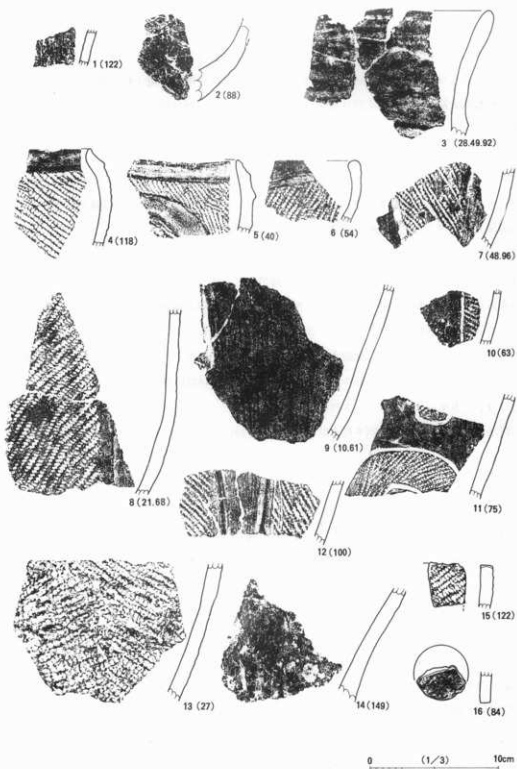
遺物

無し。

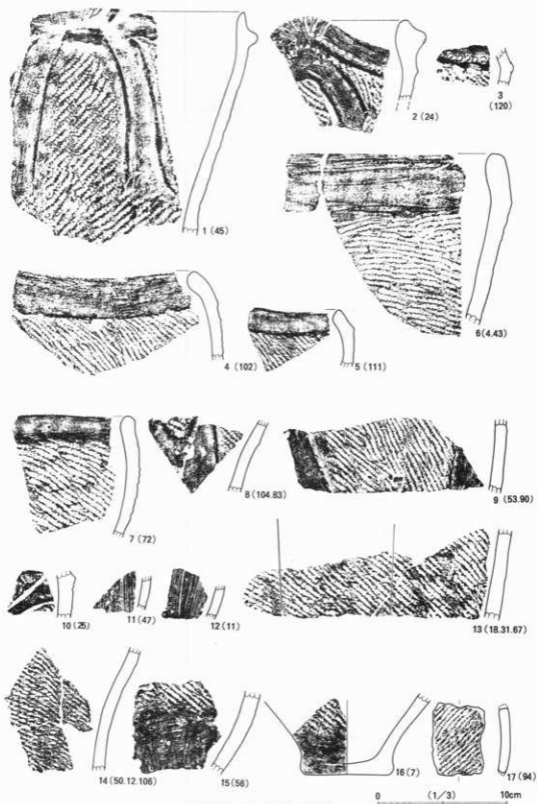
(6) グリッド出土縄文土器 (第9・10図)

第1群土器 (1~8)

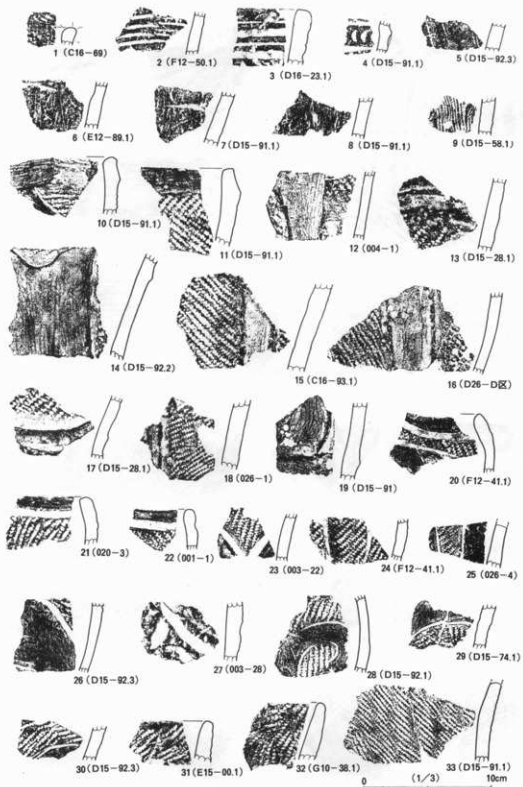
早期の土器を一括する。1は撚糸文系土器である。口唇部形態が外肥し、口唇部にまで単筋縄文(RL)を施文する。井草式土器である。2~4は沈線文系土器である。2は胴下半部から底部にかけての土器片で、横位の太沈線が施文されるものである。3は口縁部が外そぎ状を呈し、口縁部直下に横位の太沈線を施す。太沈線の周囲には付属的文様要素としての細沈線を巡らす。4は横位の太沈線の間に三日月状の刺突文を施すものである。これらは全て田戸下層式



第7图 023土坑出土土器



第8图 024土坑出土土器



第9図 グリッド出土縄文土器(1)

土器である。5～8は胎土に微量の植物繊維を含む無文土器である。器面の調整は表裏面共にナデによるものである。田戸上層式土器から子母口式土器にかけての土器である。

第2群土器(9)

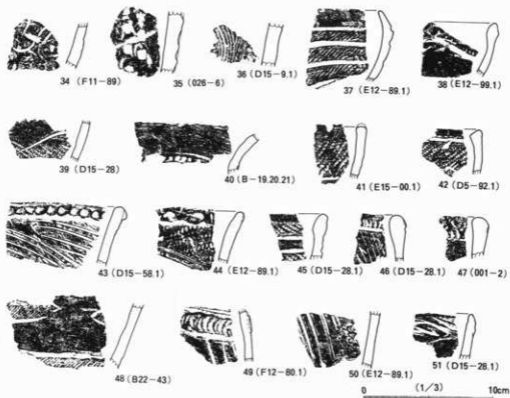
前期の土器である。9は撚糸文を施すもので、胎土に多量の植物繊維を含んでいる。黒浜式土器と考えられる。

第3群土器(10～33)

中期の土器である。10～19は隆帯によるU字文や逆U字文を施すものである。11は単節縄文(LR)を羽状に施文する。20～30は沈線によりU字文や逆U字文を施文するものである。20～22は口縁部の破片で、口縁部直下に沈線が走る。28～30は胴部に渦巻き状の沈線が施され、沈線外は無文(磨消縄文)となる。31～33は器面全体に縄文を施文するものである。これは全て加曾利EIV式土器の範疇に属すると考えられる。

第4群土器(34～47)

後期の土器を一括する。34・35は刺突文を主文様とするもので、34は沈線区画の弧線文内に刺突が見られる。36は条線が施される。37～42は加曾利B式土器の精製土器である。37は帯縄文系の鉢形土器である。38は波状口縁部を呈し、口縁部直下にキザミを持つ。39～42は加曾利



第10図 グリッド出土縄文土器(2)

B3式土器の土器で、胴部にコンパス文などを持つ。42は口縁部直下に沈線を巡らし、以下縄文帯を持つ碗形土器と考えられる。43・44は加曾利B式土器の粗製土器で、口縁部直下に紐線文が巡らされる。胴部は摺の粗い縄文と斜位沈線が施文される。45～47は安行1式土器である。45は帯縄文系の精製土器である。46・47は安行1式土器の粗製土器で、口縁部が内湾するか、もしくは直行する深鉢形土器である。口縁部直下に沈線と刺突文が施文される。

第5群土器（48～51）

晩期に属する土器を一括する。48は胴部に平行沈線と棒状の沈線が見られ、その内側に縄文を残すもので、その他は無文（磨消縄文）となる。埴山式土器と思われる。49・50は晩期の粗製土器で、49の一部には紐線文が認められる。紐線上は爪形刺突文が連続的に施される。51は折り返し口縁を持つ粗製土器で、折り返し部に摺糸文が施文される。

(7) グリッド出土土製品（第11図）

土偶（1）

本遺跡から加曾利B式土器に属する山形土偶の顔部が1点出土している。眉部及び顎の部分は隆帯の貼り付けにより作出される。目・鼻は瘤状の貼り付けにより作出され、目部には円形竹管による刺突が施される。口の表現は円形の粘土の貼り付けによるもので、中央が窪む。また、口の周りには円形の刺突文が施される。耳部は穿孔がなされ、耳栓を模造したものを差し込んでいたと考えられる（茨城県福田貝塚に見られる山形土偶にも同様なものがあり、粘土塊を差し込むものが出土している）。頭部には円形刺突文と縄文が施文される。裏面は瘤状の貼り付けが剥がれた部分があり、その周囲には沈線が巡らされる。

ミニチュア土器（2）

2は手握状のミニチュア土器である。口縁部が約半分欠損する。

土器片鏝（3）

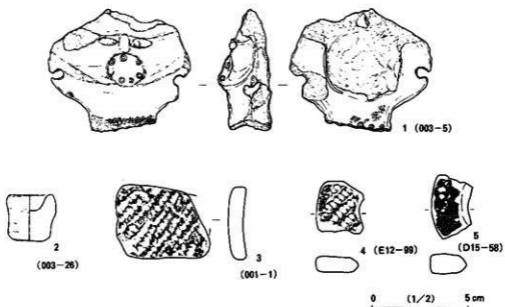
3は加曾利E式土器の胴部破片を用いた土器片鏝である。平面形態は長方形を呈する。長軸にスリットを施す。一部を欠損する。

土製円盤（4・5）

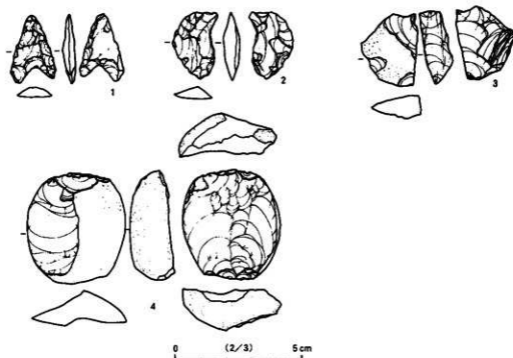
4・5は加曾利E式土器の土器片を用いた有孔土製円盤である。何れも部分的な破片である。穿孔は両側からあけられている。

(8) グリッド出土石器（第12図）

それぞれ単独で出土している。1は石鏝である。腹面に大きく主要剥離面を残す。安山岩。2は石鏝の未製品と思われる。黒曜石。3は楔形石器である。図面の側面方向から両極剥離を数回行った後に、図面の上下両端から両極剥離を行って折れてしまっている。黒曜石。4は楔形石器である。円鏝を素材とし、上下両端から両極剥離を行っている。チャート。



第11図 グリッド出土縄文土製品



第12図 縄文時代石器

3. 平安時代

平安時代の遺構は壑穴住居8軒である。検出地点は2か所に集中するが、何れも小高遺跡の西に位置し、南北から迫る谷津によって台地が狭まっている地点の南の谷津に添って展開している。カマドを検出した住居のうち、5軒が北側にカマドを持っている。住居は調査区が狭いために全体を調査できたものは1軒もなく、また耕作による擾乱も著しいという悪条件の中でも、良好な資料を提供してくれたものも何軒も見られた。住居の検出されなかった地点についても、擾乱が多かったことを考慮すると、この結果は最小限の遺構の検出であったと考えたい。

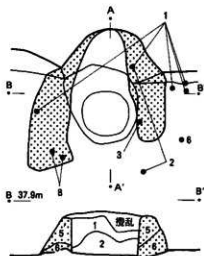
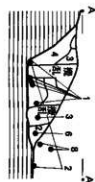
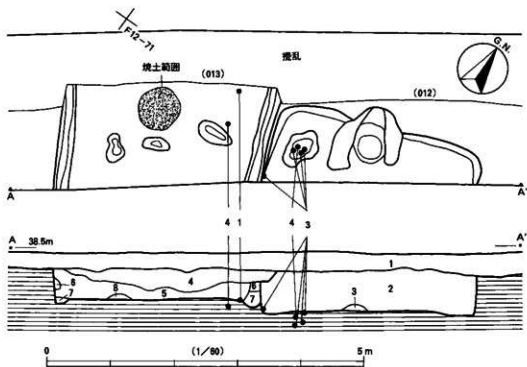
(1) 012壑穴住居

遺構(第13図)

グリッドでF12-61・62、F-71・72地点に位置する。住居の南側約4分の3が調査区外になる。現況は畑で、道路と平行して住居床面までトレンチャーによる擾乱を受けている。覆土は単一層で、ロームブロックを多量に含み全体に脆い。人為的に埋め戻されているようである。住居の規模は主軸と直交する軸で3.34mである。北東及び北西コーナーは隅丸方形で、主軸方位はN-20°-Wである。残存壁高は20~25cmである。周溝は確認できない。北西コーナー脇に楕円形のビットがあり、上端で45~65cm、深さ10~17cmを計る。北東コーナー床面は軟質で、若干擾乱きみである。住居北壁中央よりやや西側に片寄ってカマドがつくられている。カマドも住居同様トレンチャーの擾乱を受けているが、袖の基部や廻り方面は辛うじて残存している。左袖に比べて右袖の残りは悪いが、両袖共ハードロームの地山を基底部とし、灰褐色の砂質粘土で袖部を作り出している。火床部はほぼ中央部にあるが、掘り方は極めて浅い。

遺物(第14図)

土師器片、須恵器片が主な遺物である。1は土師器杯で、外面底部は回転糸切りの後周囲を回転ヘラケズリしている。口縁端部は外側につまみ出されており、内面は剝離痕が目立ち、ぼろぼろとしている。カマド袖の左右から出土しており、住居に伴う遺物と判断される。7は土師器甕の胴部片で、肩部に小形の突起を付けている。胴部は横位及び斜位のヘラケズリ調整を施し、器壁はかなり薄く仕上げられている。カマド左袖の先端部からの出土である。破片の出土位置はこの袖部にほぼ限定され、カマドの補強材として利用されていた可能性がある。5は須恵器甕の底部片で、窪みの部分(スクリーントーン)に墨の付着痕(?)が見られる。転用碗の可能性もある。覆土中からの一括遺物である。2及び3は土師器甕の口縁部及び底部片である。カマド及びビット内からの出土である。4は土師器甕胴部片で、ビット覆土からの出土である。6は土師器杯片で、外面に墨書が見られるが判読できない。カマド右袖外側の床面近くからの出土である。8は軽石(7.6g)で図面下端面は平滑である。これは覆土中からの一括遺物である。他に縄文土器片が出土している。



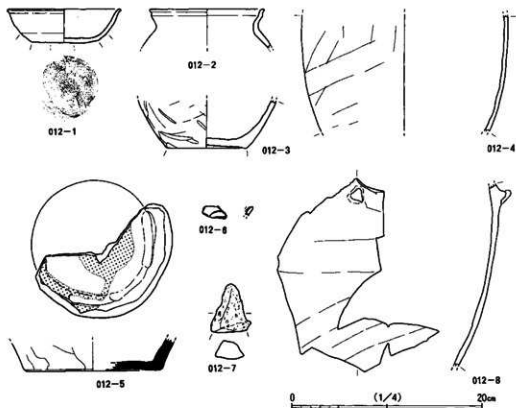
012. 013住層土層

1. 表土
2. 黄褐色土 ロームブロック多量に含む。
3. 灰褐色砂 カマドの流出。
4. 黒褐色土 ローム粒・炭土粒含む。
5. 暗褐色土 ローム・炭化物・炭土粒含む。
6. 黄褐色土 ソフトローム含む。
7. 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック含む。
8. 暗赤褐色土 焼土粒主体。

012カマド土層

1. 暗褐色土 砂質粘土、焼土粒多量に含む。
2. 赤褐色土 砂質粘土少量、焼土粒多量に含む。
3. 明褐色土 砂質粘土多量に含む。
4. 赤褐色土 砂質粘土、焼土粒多量に含む。
5. 赤褐色土 砂質粘土、焼土ブロック多量に含む。
6. 灰褐色土 砂質粘土多量に含む。

第13図 012・013 竈穴住居、カマド実測図



第14図 012 竪穴住居出土遺物実測図

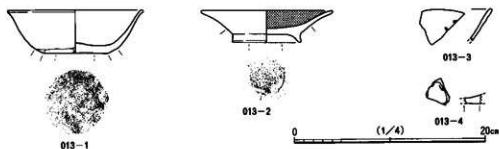
(2) 013竪穴住居

遺構 (第13図)

グリッドでF12-71地点に位置し、012遺構の西壁に接するように検出された。カマド及び南壁が検出されなかったため、住居のほぼ中央のみの検出であると考えられる。わずかであるが、013が012をきっているため、013の方が012より新しいと判断される。012同様現況は畑で、南側半分が住居床面までトレンチャーによる擾乱を受けている。覆土は大きく上下2層に分層できるが、全体にローム粒、焼土粒、炭化材粒を含む。住居の規模は主軸と直交する軸で3.30mである。壁コーナーは検出されなかったが、012同様隅丸方形と考えられる。主軸の方位はN-26°-Wと想定される。カマド位置は、覆土中のカマド構築材の流れ方がわからないのではっきりしないが、012と同じであれば北側に位置すると考えられる。壁の残存高は25~30cmである。周溝は幅25cm、深さ12cmで、掘り方は明瞭である。周溝の覆土はローム粒・ロームブロックを主体としている。主柱穴とは考えにくい。検出面中央にほぼ一直線上に3基の不定形のピットが検出された。深さは10~20cmほどである。その中央のピットよりやや北側の床面直上に厚さ8cmほどの焼土が堆積していた。床面の被熱痕は不明だが、焼失家屋と考えられよう。

遺物 (第15図)

遺物は土師器杯や甕が主体である。1は土師器杯で、底部外面は回転糸切り後、周囲を回転ヘラケズリをしている。底部内面中央は盛り上がり、磨耗している。床面直上からの出土である。2は内面黒色処理の土師器皿である。内面はヘラミガキで、底部には回転糸切り痕を残す。3は土師器杯片で、体部外面に墨書が見られるが、判読できない。4も土師器杯片で、こちらは体部外面に墨書が見られるが、同様に判読できない。底部は回転糸切り痕を残す。以上何れも床面直上からの出土である。他に覆土中より鉄滓塊(82.1g)、タタキ目を残す須恵器甕片、多量の土師器甕片、内面黒色処理を施す付け高台の碗及び同タイプの土師器碗、そして数個体分の土師器杯片、縄文土器片があるが何れも小片で図示できないのが残念である。なお、012、013遺構が隣接しているために両遺構一括遺物として取り上げられている遺物が多量にある。これはほとんどが012遺構に伴うものである。それには鉄滓塊(15.0g)及び多量の土師器甕片が含まれる。

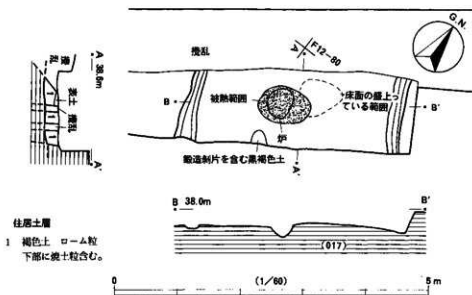


第15図 013 竪穴住居出土遺物実測図

(3) 017竪穴住居

遺構 (第16図)

グリッドでF11-89、F12-80地点に位置する。カマド、北西壁及び南東壁が検出されなかったため、住居のほぼ中央のみの検出と考えられる。覆土は約20cmの厚さで、ローム粒が混在し、下部に焼土粒を含む。規模は主軸と直交する軸で3.45mである。壁コーナーは検出されていないが、012同様隅丸方形と考えられる。主軸方位はN-29°-Wである。カマドは検出されていないので、位置は不明。南東側の壁は深さが17~26cmであるが、北西側壁は残りが悪く、周溝がかろうじて確認できるのみである。南西側周溝は深さ6cmで、南側の壁際での幅が35cmであるのに比べ、北側端では20cmと狭くなる。北東側壁の周溝は幅20cmで深さは西側と同じくらいである。柱穴は確認できなかった。床はかなり凸凹が目立つ。床面のほぼ中央よりで炉を検出した。炉は長軸50cm、短軸38cmの楕円形で、深さは15cm程度である。住居床面を掘り込んだだけのもので、覆土には多量の鍛冶滓、炭化物粒及び焼土粒を含んでいる。掘り方は赤褐色に被熱し



て、その範囲は炉の掘り方を中心に、85～60cmに及ぶ。また炉のすぐ南側床面直上からは鍛造剥片と焼土粒と炭の細粒及び黒褐色土が混在した塊が、厚さ2cmほど堆積しているのが検出された。肉眼観察では炉の覆土とほとんど変わらない。炉の覆土は磁選すると、ほとんど磁着するほど鉄分の密度が高い。

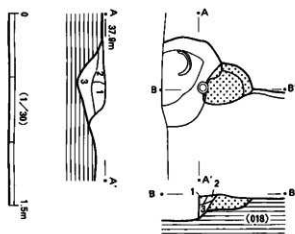
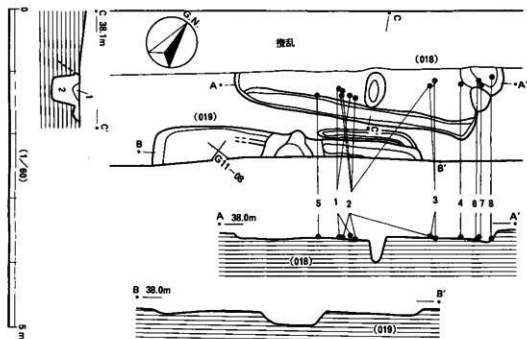
遺物

上記の鍛冶滓や鍛造剥片を含む塊のほか、少量の土師器、須恵器で、鉄製品の出土はない。遺物量は極めて少なく図示できるものはない。

(4) 018竪穴住居

遺構 (第17図)

グリッドでF11-98地点に位置する。019遺構のすぐ北側に接している。南東壁、南及び東コーナーを検出した。北側の大半が既存の道路建設時に削平されている。覆土の状況はわからないが、019同様かなり覆乱を受けているものと思われる。規模は主軸に添って4.3mである。南及び東コーナーは丸みを帯びているので、全体は隅丸方形と考えられる。主軸の方位はN-63°-Eである。残存壁高は10cmである。南東壁際には周溝が確認されたが、南西及び北東側の周溝は不明。出入り口に伴うと考えられるピットが南東壁際中央部に1か所確認された。掘り方は長径56cm、短径30cm、深さ35cmで細長く規模が大きい。カマドは検出した住居の中で唯一北東壁に作られている。しかも住居の規模から見て、かなり中心より東側に偏って作られているようである。出入り口ピット及び他の住居のカマドの位置からすれば、本来はカマドを北側に構築したものと考えられる。カマドは右袖と火床部半面だけが残っているが、内部からは良好な遺物が出土している。

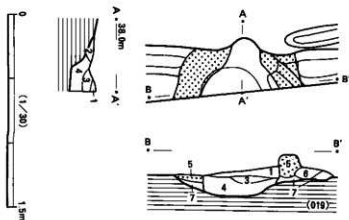


018カマド土層

1. 焼土ブロック
2. 暗褐色土 焼土粒多量を含む。
3. 暗褐色土 焼土粒多量を含む。

019カマド土層

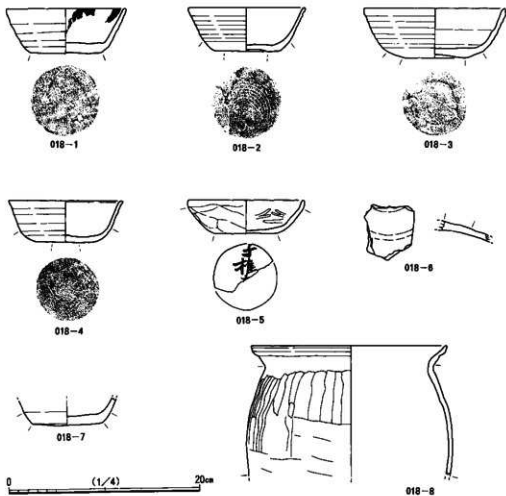
1. 暗褐色土 焼土ブロック多量を含む。
2. 褐色土 砂・ロームブロック含む。
3. 暗灰褐色砂
4. 暗灰褐色砂 ロームブロック多量、黒色土少量含む。
5. 砂質粘土 カマドソデ。
6. 暗褐色砂質土
7. 褐色砂質粘土 ロームブロック含む。



第17図 018・019 竪穴住居、カマド実測図

遺物（第18図）

土師器を主体とし、他に須恵器製の小片が出土する。1は土師器杯で、底面には回転糸切り痕は見えない。器体は歪んで、ちょうど注ぎ口状になった部分には油煙が付着しており、この部分を利用して灯明皿として使用されていたようである。2は土師器杯で、底部には回転糸切り痕を残す。3は土師器杯で、2同様底部に回転糸切り痕を残す。4は土師器杯で、調整は2同様である。5は前述までの杯とはタイプが異なる土師器杯で、内面はヘラミガキ、口縁部は横ナデ、外面及び底部はヘラケズリ調整を施す。また、外面底部に墨書（「子権□」）が見られる。6は土師器蓋の破片で、外面中心よりは回転ヘラケズリ調整を施す。外面に僅かに墨書が残るが判読できない。7は土師器杯で、口縁を全く欠損するが、底部は完存する。8は土師器甕で、外面はヘラケズリで、口縁の折り返しをはっきりと観察できる。6・7・8ともカマド内からの出土である。他に、口縁を端部より1.3cmほど底部寄りやや内側に折り曲げた皿状の土師器、蓋と考えられる土器片、高杯の脚部片などが出土している。



第18図 018 竪穴住居出土遺物実測図

(5) 019竪穴住居

遺構（第17図）

グリッドでF11-98、G11-08地点に位置する。018遺構のすぐ南側に接している。北壁、西及び北コーナーを検出した。住居の規模から見て大半が路線の外側に入っているものと思われる。覆土の状況はわからないが、018同様かなり攪乱を受けているものと思われる。主軸と直交する軸で4.25mである。北及び西コーナーは丸みを帯びているので全体は隅丸方形と考えられる。規模は主軸の方位はN-37°-Wである。残存壁高は3~20cmである。カマドより東側で周溝が残存しているが、西側については本来あったものが、攪乱によって遺存していないものと思われる。また、東側壁の外側に別個に1条の溝があるが、形態的には住居の壁周溝に類似している。柱穴は検出されず不明。床面は攪乱が深く及んでいることがあり、かなり凸凹が目立つ。カマドは北壁ほぼ中央に位置する。火床面は調査範囲外になるため、両袖の一部と煙道部を調査したのみである。調査時では、カマドが一度作り替えられていることが観察され、新しいカマドの火床面下には、砂及びハードロームブロックを多量に含む土（3・4層）が入れられている。また、カマドの袖も砂質粘土とロームブロックの混合土の上に作られている。この二次にわたるカマドの構築が確実であれば、住居北側の周溝が第二次のカマドに伴うものである可能性もある。ただし、これに伴う住居床面は高いレベルにあったことが予想されるため仮に存在したとしても、攪乱にあっており、住居床面からの検証は不可能である。

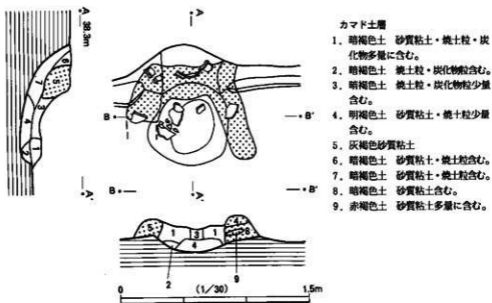
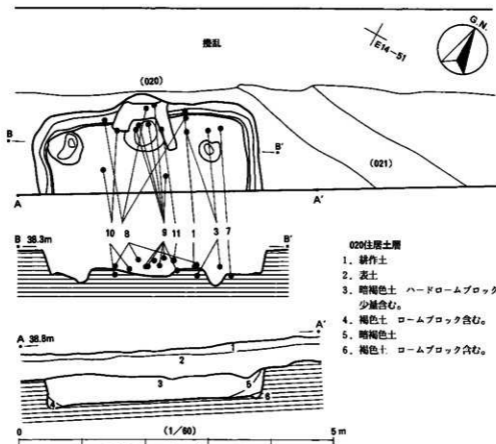
遺物

破片で図示できないが、大形の土師器杯片が出土している。総じて遺物量は極めて少ない。

(6) 020竪穴住居

遺構（第19図）

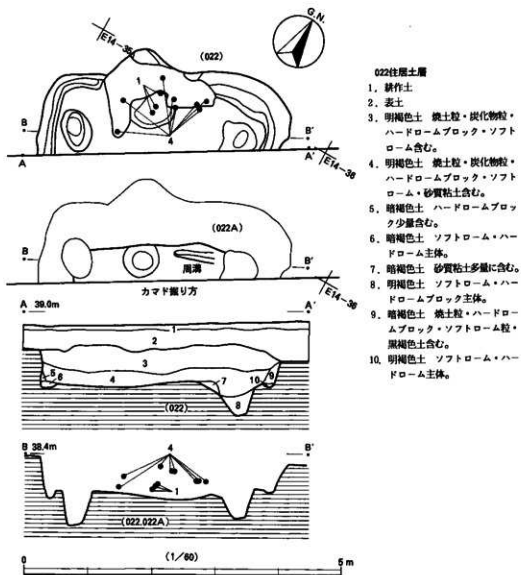
グリッドでE14-50、E14-60地点に位置する。覆土は、周溝にロームブロックを主体とする褐色土が、床面直上にカマドの崩落土があるが、大半がハードロームブロックを多量に含む暗褐色土で占められている。規模は主軸と直交する軸で3.35mである。北及び西コーナーは丸みを帯びているので全体には隅丸方形と考えられる。主軸方位はN-31°-Wである。残存壁高は35cmほどで他の住居に比べると残りは良い。住居検出範囲では周溝は全体を回っている。幅は20cm前後で深さは23cmとかなり浅い。2個の主柱穴を検出しているが、床からの掘り込みは極めて浅く、18~20cm程度である。断面からは柱痕はわからない。カマドは北壁ほぼ中央に位置する。カマドの崩壊による砂の流出は住居のほぼ中央にまで達している。土層断面観察から、住居廃絶と時を同じくして一気に崩壊した模様である。左袖の先端部は残っていないが、右袖の残存状況から、袖が「ハ」の字状に開いているのがわかる。住居の周溝は袖の下で終わっており、カマド内側にまで及んでいない。火床面は丸く窪んでいるが、被熱状況については不明である。



第19図 020 壁穴住居・カマド実測図

遺物（第22図）

1・2は土師器杯で、外面底部は回転糸切り後、周囲をヘラケズリしている。カマド右袖外側の床面よりやや浮いた状態で検出された。3は内面黒色処理の土師器杯である。内面から外面口縁にかけて丁寧なヘラミガキ調整で、底部はヘラケズリ調整である。また、外面に「山」と読める墨書が見られる。住居北コーナー覆土中からの出土である。4・5・6は土師器杯片で、いずれも外面に墨書があるが、判読できない。覆土中の一括遺物である。8は土師器甕口縁部、7・9・10・11は土師器甕底部である。甕はカマド上面から住居中央にかけて流れ込むような形で出土している。他に多量の土師器甕、杯片及び支脚片、縄文土器片が出土している。

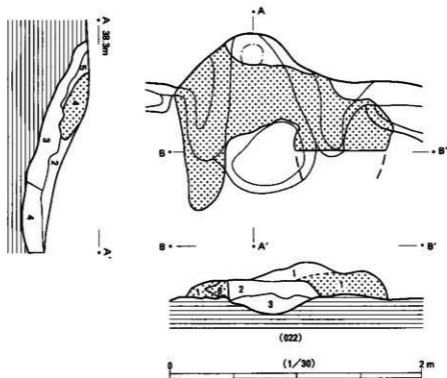


第20図 022・022A 竪穴住居実測図

(7) 022・022A 竪穴住居

遺構 (第20・21図)

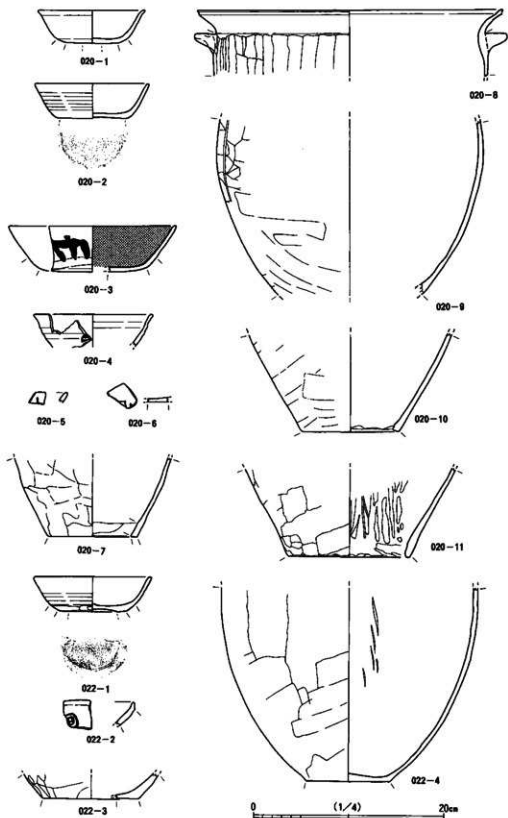
グリッド番号でE14-35地点に位置する。住居の南側約4分の3が調査区外になる。2軒の住居が重複しており、古い方を022A、新しい方を022とする。調査区域の土層断面からは2軒の住居の重複関係は読み取れない。図示した断面は022の断面になるが、覆土中に少量の焼土粒・炭化物粒・ハードローム・ソフトロームを含んでいる。022は主軸と直交する軸で最大3.9mを計る。022Aはプランが不明瞭のため測定できないが、022に比べるとかなり小規模であるのがわかる。022は北コーナーがかなり大きな弧を描く隅丸方形。022Aは北壁のみ確認できるが、それは022とほぼ平行している。主軸方位については、022はN-23°-Wで、022Aについてもほぼ同様と考えられる。壁残存高は022で40~50cmで、他の住居に比べるとかなり高い。022Aは北壁でわずかに6~8cmの比高差を認められるが、東、西壁は022とほとんど床面が同レベルであるためか全くわからない。022の周溝はカマドの袖の内側を除いて検出した範囲内では全周



カマド土層

1. 灰褐色砂質粘土 焼土粒少量含む。
2. 暗褐色土 砂質粘土多量、焼土粒・炭化物粒少量含む。
3. 暗褐色土 砂質粘土多量、焼土粒含む。
4. 灰褐色砂質粘土
5. 赤褐色土 焼土・砂質粘土多量に含む。
6. 暗褐色土 砂質粘土多量、ハードロームブロック少量含む。

第21図 022 竪穴住居カマド実測図



第22图 020·022 竖穴住居出土物实测图

する。北コーナーはかなり幅広くなっている。深さは余り深くなく、ほとんど床面のレベルと同じ地点もある。022Aはカマド右側に若干周溝の痕跡が残るのみである。2個の支柱穴を検出しているが、共に022に伴うと判断される。掘り方は明瞭で、深さはそれぞれ30cm、52cmである。022のカマドは北壁中央よりやや西側に偏って作られている。カマドの崩壊による砂の流出は住居の中央部にまで達している。022のカマドは右袖を調査時に掘り過ぎて消失してしまったが、左袖に比べて規模が大きい。掘り方は左右両袖共ハードルーム地山を袖状に掘り残し、その上に構築材（砂質粘土）をもって、袖部としている。022Aは床面に火床部の掘り方を若干残しているのみである。

遺物（第22図）

1は土師器杯で、底部は回転糸切り後、周囲をヘラケズリしている。カマド内覆土中からの出土である。2は土師器杯で、外面は手持ちヘラケズリである。外面に墨書を残すが判読できない。覆土中の一括遺物である。4は土師器甕で、下半部だけの破片である。上半部は縦位の、下半部は斜位の幅広のヘラケズリである。カマド袖及びその周辺から出土している。他に図示できなかったものでは多量の土師器甕、杯片及び少量の縄文土器片がある。

4. 中世・近世以降

中世及び近世以降の遺構は土坑2、溝8及び塚2である。中世の遺構は調査範囲のほぼ中央より東側、グリッドでC16、D16、B20地点に集中する。近世以降の遺構は散在する傾向にある。塚の内1基は八坂神社参道東側に位置する。

(1) 002土坑

遺構（第23図）

グリッドでB20-75・76地点に位置する。001溝の西6mの方向にある。検出面はハードルーム面だが、これは深耕により表土層の下面が下がったためである。掘り方面に3～15cmの厚さで灰白色の粘土を貼り付けて、壁及び床面を作り出している（スクリーントーン部分）が、遺構の縦横にトレンチャーの攪乱（破線部分）を受けており、残存状況は極めて悪い。粘土表面は鉄分の沈着により茶褐色に変色している。規模は、粘土を貼り付けた状態で、上端が2.05×3.05m、床面は1.1×1.8m。粘土を除去した掘り方面を出した状態で、上端2.2×3.3m、床面は1.9×2.8mである。粘土床面までの深さは25cm、掘り方面までの深さは30cmである。

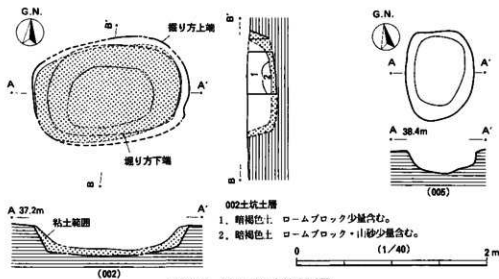
遺物（第30図）

壁面に近い覆土上層より、至和元寶（1054年初鑄）が1点出土している。他に遺物はない。

(2) 005土坑

遺構（第23図）

グリッドでC16-86地点に位置する。004溝のすぐ南側に接している。004溝と何らかの関係



第23図 002・005土坑実測図

があることが考えられる。確認調査時にその一部が確認され、拡張して調査したものである。確認面はハードローム面で、掘り込みは不明瞭であり、底面は若干凸凹がある。規模は長径95cm、短径72cm、深さ23cmである。覆土は暗褐色土で、少量のロームを含んでおり、締まりがある。

遺物

土師器壺・杯片、須恵器杯・瓶類の小片、縄文土器片が出土しているが何れも少量で、図示できるものはない。

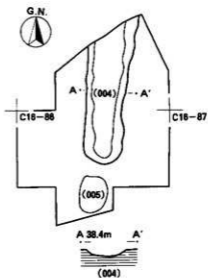
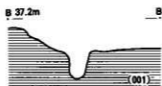
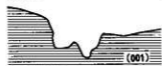
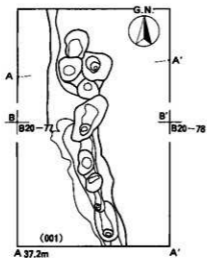
(3) 004溝

遺構（第24図）

グリッドでC16-76・86地点に位置する。確認調査時にその一部が確認され、拡張して調査したものである。確認面はハードローム面である。掘り方はやや凸凹があるが、壁・床ともに明瞭で堅く良く締まっている。掘り込みは浅い。ほぼ南北方向に走っており、両側の延長線上に005土坑がある。両遺構に時期的な同一性も考えられる。覆土は3～5cmのロームブロックを含む褐色土層である。

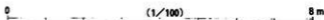
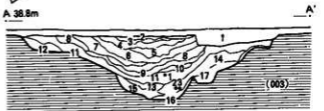
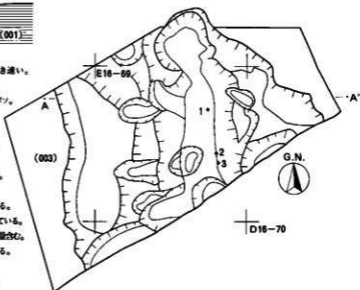
遺物（第28図）

004溝には直接伴わないが、壁の外側から五輪塔の空風輪（14）が1点出土している。五輪塔の材質は軟質砂岩で、基部から先端にかけて大きなひびが放射状に入っており、表面もぼろぼろとしてやや脆いが、細かな整の跡が確認できる。長さは23cm、幅は13cm、重量は4.45kgで、断面はやや偏平な円形である。溝の覆土中の遺物は土師器の小片が多いが、他に雲母片岩の小片が1点、縄文土器片が出土している。特に遺構の時期を決定できる資料はないが、中世遺構と考えるのが妥当であろうか。

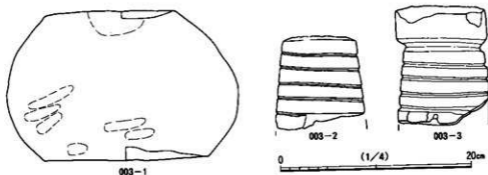


003層土層

1. 原褐色土 少量のローム含む耕作土、乾き強い。
2. 明褐色土 硬くしまったローム混入土。
3. 明褐色土 2層より白茶けて砂っぽくボソボソ。
4. 黒色土 粘りのあるボソボソの土、すぐにカラカラに乾く。
5. 暗褐色土 多量のローム含む、空気がある。やや軟質。
6. 暗褐色土 少量のローム含む。緻密な土。
7. 褐色土 粘りのややある砂質土。密。
8. 褐色土 7層よりやや、サラッとしている。
9. 暗褐色土 少量のローム。ややボソボソしている。
10. 茶褐色土 粗さ0.5mm程のロームブロック少量含む。
11. 明褐色土 更にロームとブロックがふえる。やや密になる。
12. 茶褐色土 軟質の少量ローム含む土層。
13. 暗褐色土 大きいブロックが混入する、ざらに群、ボソボソ。
14. 暗褐色土 13層より小径のロームブロックを全体に含む。更に粗。
15. 暗褐色土 14層より暗い色調でローム+褐色土。しめり気あり。やや密になる。
16. 褐色土 ローム主体。2~3cmのブロックも含む。密。
17. 茶褐色土 ロームブロック主体で埋め戻したような土。ボソボソ。



第24図 001・003・004 溝実測図



第25図 003 溝出土遺物実測図

(4) 001溝

遺構（第24図）

グリッドでB20-67・77地点に位置する。確認調査時にその一部が確認され拡張して調査したものである。002土坑の東側6mに位置する。確認面はハードローム面である。現況は畑で、トレンチャーが十字に交差し、攪乱が著しい。掘り込みは明瞭だが不整形で、床面に連続してビット状の掘り込みが認められる。断面観察では、ビット内の覆土はロームをかなり含みかなり脆い状態であり、またビット自体もかなり不整形の掘り方であるのがわかる。ほぼ南北方向に走り、調査区北端でプランが不明瞭になる。

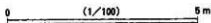
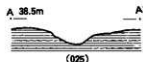
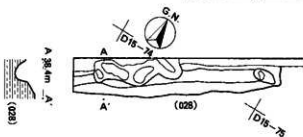
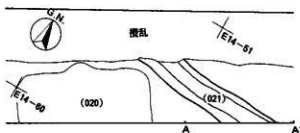
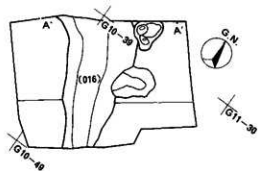
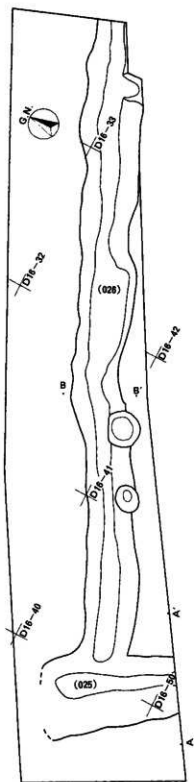
遺物

覆土中より布目瓦片1点、土師器小片、須恵器甕・瓶類の小片、雲母片岩小片2点、縄文土器片が出土している。特に多いのは土師器片であるが何れも小片で、断面は磨耗しているものが多い。特に遺構の時期を決定できる遺物はない。

(5) 003溝

遺構（第24図）

グリッドでC16-59・68・69・78・79、C17-50・60地点に位置する。この地点は小高遺跡のほぼ中心に位置し、南北から谷津が迫ってきて、台地が少し細くしぼられてきたところである。その最も狭くなった地点を結ぶような方向に延びている。2,500分の1の地図を観察するとちょうどこの遺構に重なるように等高線が台地を横切って延びているのが読み取れる。これを根拠にすれば、本遺構は堀切状の遺構の一部として残っているものと考えられるのではないだろうか。この遺構に添って西側には土塁状の高まりが見られる。これは多分本遺構に伴う遺構と考えられる。この溝は確認調査時にその一部が確認され、拡張して調査したものである。現況は畑で、所々に攪乱が見られる。掘り方は不整形で、南側では幅7.4mと広いが、南側では4.3mと狭くなる。調査区を南北に貫いて、調査区外に延びている。壁面には何か所かに平坦面があり、またビット状のものも随所に見られる。深さは最も深い地点で、確認面より1.6mを計



第26图 016・021・025・026・028 清実測図

る。1～9層までの上層は自然堆積、10～17層に至る下層は人為的な埋め戻しと考えられる。この遺構は幾つかの溝状遺構を中心とした遺構の複合体のように考えられるが、調査範囲が極く一部であることを考慮すると、断定することは控えたい。出土遺物より中世の遺構と確認できる。

遺物（第25・30図）

五輪塔の水輪1点（1）、宝篋印塔の相輪2点（2・3）の他、景德元寶（1004年初鑄）、政和通寶（1111年初鑄）、洪武通寶（1368年初鑄）といった北宋銭が各1点ずつ、土師器壺小片、須恵器片、砥石、軟質砂岩片、雲母片岩片、土偶、縄文土器片が出土している。水輪は擬宝珠形で下面に比べて上面部が小さく、また上下面ともに内側にえぐれている。表面には鑿の跡が僅かに残る。銘は確認できない。9層中より出土している。相輪は九輪の下部を欠いてその一部を残すのみのも（2）と、九輪の上半分と請花部の一部を残したもの（3）の2点である。後者は、請花部は円筒形で全く装飾されず退化し、簡略化されている。10層中からの出土である。水輪・相輪ともに砂岩を母岩としている。また水輪と同一層で、雲母片岩の破片が出土している。表面には彫刻の痕跡はないが、下総型板碑の石材の一部の可能性がある。これらの遺物は一括廃棄遺物であると考えられる。石塔の時期についてはその特長により、水輪・相輪ともに比較的新しく、16世紀代に比定される。従って、遺物より見て、本遺構は戦国末期（16世紀代）に埋没したものと考えられる。

(6) 016溝

遺構（第26図）

グリッドでG10-39地点に位置する。確認調査時にその一部が確認され、拡張して調査したものである。調査地点の南半分は既存の道路の法面によって、一部削平されている。溝は北北西から南南東に向かって延びている。幅は0.8～2 m、深さは40cm弱で断面はU字型である。東側に2か所土坑状の落ち込みが見られる。

遺物

縄文土器の小片が出土している。図示できる資料はない。

(7) 021溝

遺構（第26図）

グリッドでE14-50・51地点に位置する。すぐ西には020竪穴住居があるが、全く時期の異なるものと考えられる。ほぼ東西方向に延び、幅80cm、深さ8cmで掘り方は浅い。覆土は暗褐色土で、締まりはあるが表土層とほぼ同質で、新しい溝と考えられる。

遺物

無し。

(8) 025溝

遺構 (第26図)

グリッドでD16-40地点に位置する。026溝と直角に交わる。本遺構のほうが026溝より新しい。確認面はソフトローム面である。床面はかなり凸凹しており、プランもうねったところが見られる。幅は2m、深さ40cm。覆土は暗褐色土で、かなりロームブロックを含み締まりは悪い。

遺物

すべて一括遺物であるが、土師器、須恵器片、及び近世の灰釉茶碗、甕片、磁器、香炉、素焼きの植木7鉢などが出土している。土師器・須恵器は小片がほとんどで、新しい遺物には明治以降に入るのもあり、従って当遺構の時期は明治以降と思われる。

(9) 026溝

遺構 (第26図)

グリッドでD16-40・41・32・33・23地点に位置する。025溝と直角に交わる。プランは南側の線が波を打ったようで不明瞭である。幅は1.20~1.50mで、深さは約40cmである。3か所に土坑状の浅い落ち込みが見られる。覆土は暗褐色土層で、底面はかなり凸凹している。

遺物

多量の土師器細片、少量の須恵器片の他、近世の灰釉の碗小片、縄文土器片が出土している。遺物はすべて一括遺物である。

(10) 028溝

遺構 (第26図)

グリッドでD15-74・64地点に位置する。027土坑のすぐ西どなりに位置し、北側を既存の道路によって覆乱されている。調査は一部のみである。4か所に土坑状の落ち込みが見られるが、本遺構に伴うものではないようである。幅は50~80cmで、深さは20cmほどである。覆土は暗褐色土で、ハードロームブロックやローム粒を多量に含む。また、2層と3層の間には一部硬質面が見られ、道路状遺構の可能性もある。

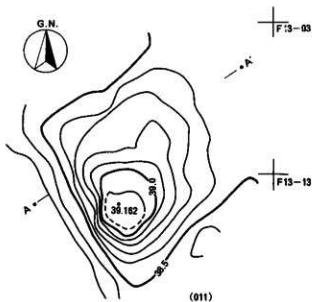
遺物

無し。

(11) 011塚

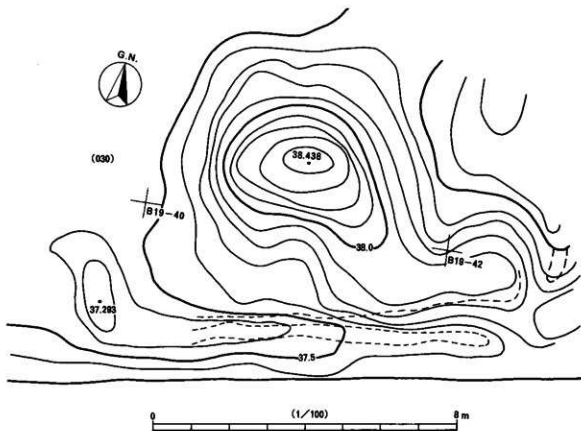
遺構 (第27図)

グリッドでF13-01・02・11・12地点に位置する。現況は植木畑である。西側は農道によって変更されており、北側は土砂の流出が見られる。頂上部でのレベルは39.162mで、裾部は38.5mほどである。規模は一辺が約5mほどの方形に近いプランと思われる。頂上部には道祖神が祭られている。



011塚土層

1. 暗褐色土 ソフトローム粒・黒褐色土少量含む。しまり悪い。
2. 明褐色土 ソフトローム多量、黒褐色土少量含む。しまり悪い。
3. 明褐色土 ソフトローム多量に含む。しまりふつう。
4. 暗褐色土 ソフトローム粒・黒褐色土少量含む。しまりふつう。
5. 明褐色土 ソフトローム多量に含む。
6. 暗褐色土 旧表土



第27図 011・030塚実測図

遺物

無し。

(12) 030塚

遺構 (第27図)

グリッドでB19-50・51地点で、八坂神社の参道の右側に位置し、すぐ脇に燈籠と、鳥居がある。頂上部でのレベルは38.438mで、道路際に添ってレベルの低い部分が溝状に延びている。また、南東側に盛土の流出が見られる。八坂神社の位置する地点は北側から西側に向かって緩傾斜しており、レベルの高い北側の社の裏は地山を削平し、逆にレベルの低い南側は土塁状に盛り土されている。この盛り土の南東端部が今回調査した塚であるが、これは本来土塁の一部であって、当初から塚としての機能を持っていたとは考えにくい。トレンチは塚の中央部には設定できず、その裾の部分に入れざるをえなかった。しかも既存の道路部に近接していたため、断面観察はほとんどできない状況であった。頂上部には「八坂太神」、「八坂神社」、「八坂神社」と刻まれた多数の石製の小形の祠が道路側に向けて並んでいるなかで、男根形石製品が数点見られた。

遺物 (第30図)

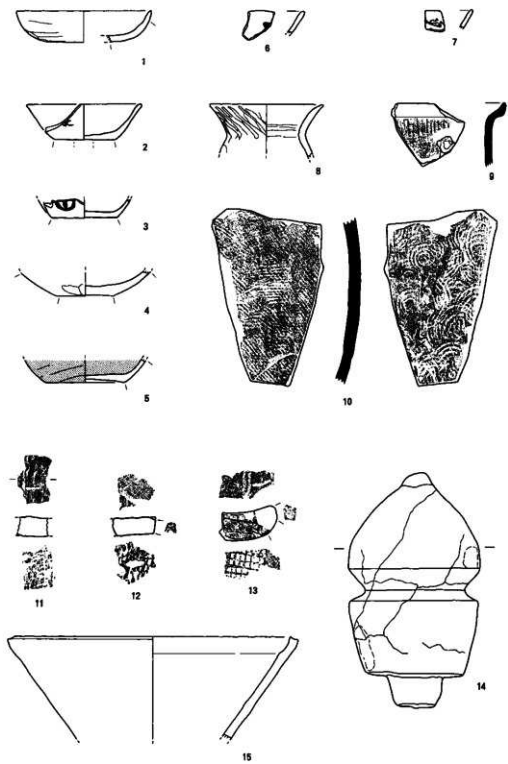
鉄滓塊、祠の石材、石棒、近世以降の陶器・磁器、寛永通寶1点(6)が出土している。

5. その他の遺物

ここでは古墳時代以降の遺物で遺構に伴わない、または出土した遺構とは時期の異なる遺物について説明する。

(1) グリッド出土及び表採遺物 (第28・29図)

1は土師器杯で、内面から外面口縁にかけてヘラミガキ、外面下端はヘラケズリ調整を施す。胎土は精選されている。005土坑の一括遺物である。2は土師器杯で、内外面ともヨコナデ、底部は回転糸切り後周囲にヘラケズリ調整を施す。外面に墨書を残すが、判読できない。B20-77グリッドの表採遺物である。3は土師器杯で、2と同様外面に墨書を残すが約半分を欠損し判読できない。D15-75グリッドの表採遺物である。4は土師器甕で、底部のみを残す。E12-99グリッドの表採遺物である。5は土師器杯で、内面はヨコナデ、外面はヘラケズリ調整を施す。内外面とも赤彩している。005土坑の一括遺物である。6・7は土師器杯の口縁部で、何れも外面に墨書を残すが、判読できない。6はD15-75グリッドの表採遺物、7はD16-40グリッドの表採遺物である。8は土師器壺で、口縁は「く」の字状に外反し、口縁及び胴部外面は縦位にヘラナデされている。古墳時代中期にあたると思われる。E12-99グリッドの表採遺物である。9は須恵器甕の口縁部片である。胴部には縦方向のタタキ目を残す。口縁は一旦外反してから上方へつまみ出される。色調は茶褐色である。時期は9世紀の前半くらいであろうか。

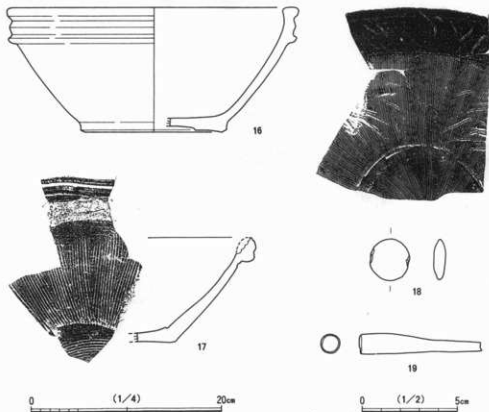


0 (1/4) 20cm

第28図 グリッド出土及び表探遺物(1)

D16-31グリッドの表採遺物である。10は須恵器甕の胴部片である。かなり大形の甕と推定される。内面は同心円状のタタキ、外面は斜位及び横位の平行タタキの後両面とも軽く撫でているようである。出土した瓦はすべて女瓦である。11・12は001溝からの一括遺物である。11・12は何れも表面がぼろぼろとしていて明瞭ではないが縄目の叩き痕を残す。ともに酸化炎焼成で、胎土中には微砂粒を含み、焼成はやや甘い。13は026溝からの一括遺物である。格子叩き目を残し、還元炎焼成で灰白色を呈する。胎土は砂粒を若干含み、やや疎である。焼成は良好。14は軟質砂岩製で004溝のすぐ脇から出土している。遺物の説明は004溝を参照されたい。15は素焼きの土鍋形態で、口縁部は横ナデ、内縁部は横位の指ナデ調整を残す。外面は使用による煤や煮こぼれによるものと考えられる異物が付着している。近世のものであろう。B19-75グリッドの表採遺物である。18は素焼きの碁石(2.1g)で、端部を2か所小さく欠いている。19は煙管の吸口(5.3g)で青緑が表面を覆っている。長さは6cmである。出土地点不明の表採遺物である。

八坂神社西側から正面にかけて1、2のトレンチを任意に設定した。何れのトレンチも総じてほぼ同種の遺物を出土している。遺物は磁器がほとんどで、皿・茶碗・湯呑茶碗・徳利・猪口・小皿で何れにも表面に明るいコバルト色の絵付けを施している。そのうち湯呑茶碗には高



第29図 トレンチ・グリッド出土及び表採遺物(2)

台裏に「岐451」と印刷したものと、「岐103」と体部と一体成型で型押ししたものがある。「岐」は、すなわち岐阜県…であると考えられる。続く数字はある団体に統制された商品番号であると考えられる。瀬戸窯にも同様のものが見られ、これは戦時中に陶磁器の生産統制が行われていて、その当時の商品番号であったということである。従って、この湯呑茶碗は昭和初期の比較的時期の限定できる岐阜県産（美濃産）のものである。他の磁器もほとんど当時期の岐阜県産を中心としたのものであると考えてまちがいあるまい。他に陶器では播鉢が2点（16・17）出土している。17は多分大阪堺産と考えられるもので、口縁の内側の部分が欠損している。胎土は土管に見られるような茶褐色をし、多量の白色砂粒と少量の小砂利を含む。外面体部は口縁近くまで回転ヘラケズリを施し、その上から口縁端まで薄く釉が掛かり黒褐色をしている。櫛目は体部及び見込にはっきりと残っているが、使用によってかなり摩滅している。堺播鉢の編年によれば、最も新しい第Ⅲ形式（19世紀前半から後半）に該当する^{注1}。一方で16は鉄釉の掛かった播鉢で極めて新しいものである。また、瀬戸・美濃の灰釉徳利片も見られる。他に、鞆の羽口、多量の鉄片、寛永通寶・文久永寶が出土している。極く最近まで当該地に鍛冶屋があったと思われる一連の遺物である。

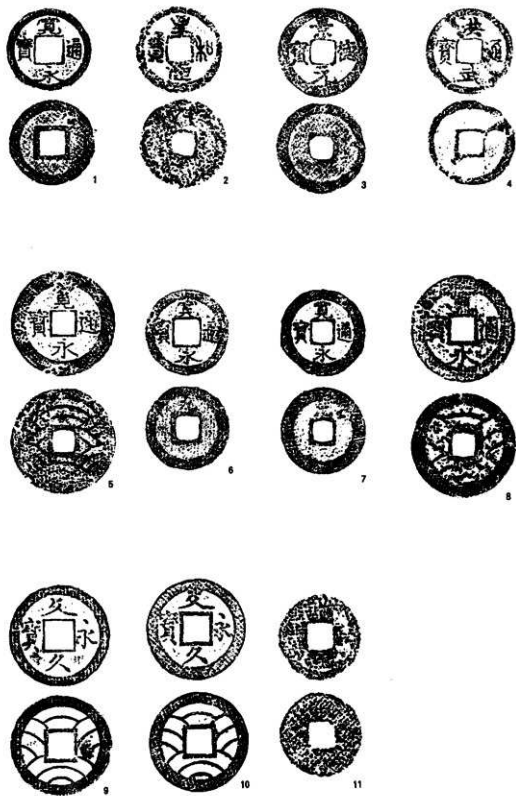
(2) 出土銭貨（第30図）

銭貨は一括して別表にまとめた。遺構に伴うものは、至和元寶、景德元寶、洪武通寶、政和通寶の4点である。

表1 銭貨計測表

標記番号	遺物番号	名称	重量(g)	外縁外径 (mm)	外縁内径 (mm)	内部外径 (mm)	内部内径 (mm)	外縁厚 (mm)	文字部厚 (mm)	備 考
第30図 1	なし(遺構)	寛永通寶	1.9	22.50	18.73	8.23	6.80	0.79	0.48	
第30図 2	002 0001	至和元寶	2.4	24.80	19.00	7.36	6.03	1.45	0.83	初鑄年1054
第30図 3	003 0013	景德元寶	2.7	24.28	18.18	6.83	6.30	0.98	0.50	初鑄年1004
第30図 4	003 17	洪武通寶	2.7	25.75	18.95	6.73	6.05	1.58	0.48	初鑄年1368
	003 14	政和通寶	2.0	初鑄年1111、4分銅5本不可
第30図 5	030 43	寛永通寶	4.6	27.85	20.03	7.00	5.80	1.18	0.90	
第30図 6	1トレ 9	寛永通寶	2.2	22.75	17.30	7.83	6.28	1.15	0.53	
第30図 7	2トレ 6	寛永通寶	1.8	23.00	16.73	6.83	5.45	0.95	0.28	
第30図 8	2トレ 2	寛永通寶	4.2	28.33	20.83	8.06	6.30	1.23	0.83	
第30図 9	2トレ 2	文久永寶	2.8	26.90	21.40	8.43	7.05	0.95	0.31	
第30図 10	2トレ 2	文久永寶	2.9	26.70	20.33	8.66	6.78	0.93	0.28	
第30図 11	2トレ 2	〇〇〇〇	1.6	22.40	6.96	0.74	

注1 江戸の陶磁器 1990年3月10日 江戸遺跡研究会第3回大会発表要旨



第30圖 錢貨拓影圖 (1/1)

表2 012竪穴住居出土物観察表

探検番号	遺物番号	器形	法量(cm)	遺存状態	成形・調整・その他表面観察	胎土	焼成	色調	出土位置
第14図1	1.15.89. 90.91.107	土師器 杯	口径12.0 底径7.0 器高3.6		ロクロ使用。口縁未切り縁、 周縁を直線的なヘラズリ、 内面に割縁痕立つ。	長石、石英微細粒 多量に含む。	やや不良	内面薄い 灰褐色、 外面黒色	カマド両袖外 側の床面直上
第14図2	3.92.107	土師器 甕	口径12.2	口縁片残存	内外面ともナデ、整形は粗 雑でナデによる接合痕、ぬ たが残る。 器喉の凸部目立つ。	長石、石英微細粒 多量に含む。ガラ ズラして砂っぽい。	良	黒褐色	カマド内、手 前の床面直上
第14図3	5.6.73. 108.114	土師器 甕	底径8.4	底部のみ残存	内面はヘラナデ、外周底部 は一方の直線的ヘラケズ リ、体部は斜位のヘラケズ リ。	長石、石英微細粒 多量に含む。	良	赤褐色	ビツ内層土中
第14図4	3.4.101	土師器 甕		割部片	内面は横方向のナデ、外面 はヘラケズリ。	長石、石英微細粒 多量に含む。	良、堅微	内面黒褐色 外面黒褐色	ビツ内層土中
第14図5	1.4	須恵器 甕	底径14.4	底部片残存	内面は底部と体部の接合部 (ユビナデ)が残る。外周 底部は割縁が著しく凹目 立つ。体部はヘラケズリ。 転用疑の可能性有。	長石、石英粒多量 に含む。緻密。 窒母含まない。	やや不良 で少々軟 質	灰色	層土中一括
第14図6		黒色土器 皿か碗		口縁部小片		褐色微粒砂多量に 含む。	良	内面黒色 外面うす い褐色	不明
第14図7	1	観石	7.6g		一面が平滑面。	ガラス質状の結晶 が顕著に見られる。		灰白色	層土中一括
第14図8	3.9.87	土師器 甕		胸部小片	内面は横位のナデ後継位の やや粗いヘラミガキ、外周 は横位及び斜位のヘラケズ リ。	長石、石英微細粒多 量に含む。	良	赤褐色 (部分的に 黒色)	カマド左袖部 の先端

表3 013竪穴住居出土物観察表

探検番号	遺物番号	器形	法量(cm)	遺存状態	成形・調整・その他表面観察	胎土	焼成	色調	出土位置
第15図1	3	土師器 杯	口径14.3 底径6.7 器高4.5	底部から口 縁にかけて 器高4.5 片欠損	ロクロ使用。 底部は加転未切り後周縁を ヘラケズリ。 器表面はなめらか、内面底 部中央が盛り上り、磨耗し ている。	黒色微粒砂多量に 含む。窒母微粒含 む。	良	薄い灰褐色 焼成時に 一部黒色化	床面直上
第15図2	6	黒色土器 皿	口径13.9 高径9.3 器高3.3	底部から口 縁にかけて 器高3.3 片残存	ロクロ使用。内面はヘラミ ガキ。 付高台、底部外面は口縁未 切り品残す。	長石、石英粒多量 に含む。	やや不良	内面黒色 外面薄い 黄褐色	層土中
第15図3	2	土師器 杯		口縁部片	体部外周に磨き。	黒褐色微粒砂多量 に含む。	良	薄い黄褐色	層土中一括
第15図4	10	土師器 杯		底部片	内面はナデ、外面はヘラケ ズリ。 底部外面に磨き。	長石、石英、褐色 微粒砂多量に含む。	良	薄い褐色	床面下

表4 018竈穴住居出土遺物観察表

調査番号	遺物番号	器形	法量(cm)	遺存状態	成形・調整・その他表面観察	胎土	焼成	色調	出土位置
第18図	1	土師器 杯	口径12.6 底径7.5 器高4.7	底部から口縁にかけて一部欠損	ロクロ使用。外面底部は直交する2方向の直線的へラケズリ。 内面には地盤が付着。	黒色微粒砂多量に含む。鉄屑(茶褐色)、長石、石英微細粒、雲母細粒を含む。	良	薄い褐色 ～茶褐色	住居床面よりやや上
第18図	2	土師器 杯	口径15.0 底径6.7 器高5.1	片残存	ロクロ使用。外面底部は回転糸切り痕を残す。立ち上り部はへラケズリ。	長石、石英粒多量に含む。鉄屑白心。磁屑。	やや不良で全体に軟質	薄い茶褐色	住居床面よりやや上
第18図	3	土師器 杯	口径12.5 底径6.9 器高4.5	底部から口縁にかけて一部欠損	ロクロ使用。外面底部は回転糸切り後周囲を回転へラケズリ。ややゆがみあり。	長石、石英、黒色微粒砂多量に含む。鉄屑(茶褐色)、雲母細粒を少々含む。	良	薄い黄褐色	住居床面よりやや上
第18図	4	土師器 杯	口径11.9 底径6.3 器高4.4	口縁一部欠損	ロクロ使用。外面底部は回転糸切り後周囲を回転へラケズリ。	長石、石英、黒色砂、鉄屑を多量に含む。雲母細粒を少々含む。	やや不良	薄い茶褐色	住居床面よりやや上
第18図	5	土師器 杯	口径12.4 底径6.5 器高3.5	底部から口縁にかけて片残存	内面はへらミガキ、口縁部はココナデ、外面はへラケズリ、底部は直線的なへラケズリ、外面底部に墨書「子権□」。	長石、石英微細粒多量に含む。	良	茶褐色	住居床面よりやや上
第18図	6	土師器 蓋		体部小片	ロクロ使用。外面は中心付近で回転へラケズリ。	長石、石英微細粒多量に含む。	良	薄い褐色	カマド内右袖部
第18図	7	土師器 杯	底径7.4 器高2.6	底面のみ残存	ロクロ使用。底部は直交する2方向の直線的へラケズリ。	長石、石英微細粒、雲母細粒多く含む。	良	薄い褐色 ～茶褐色	カマド内右袖部
第18図	8	土師器 壺	口径20.7	口縁から胴部にかけて片残存	内面はナデ、口縁部は内・外面ともココナデ、外面はへラケズリ、口縁は外側に折り返す。	長石、石英微細粒多量に含む。	良、堅脆	茶褐色	カマド内火床面

表5 020竈穴住居出土遺物観察表

調査番号	遺物番号	器形	法量(cm)	遺存状態	成形・調整・その他表面観察	胎土	焼成	色調	出土位置
第22図	1	土師器 杯	口径11.2 底径5.5 器高3.6	底部から口縁にかけて片残存	ロクロ使用。底部は回転糸切り後周囲をへラケズリ。	長石微細粒、石英大粒を含む。	やや不良	内面茶褐色 ～黒色 外面黒色	カマド石袖外側床面よりやや上
第22図	2	土師器 杯	口径12.0 底径6.9 器高3.7	底部から口縁にかけて片残存	ロクロ使用。底部は回転糸切り、内面は刷毛が著しくゴロゴロしている。仕上げはいい。	長石、石英微細粒多量に含む。	良	褐色	掘土一拵
第22図	3	黒土土 杯	口径17.5 底径11.0 器高4.7	底部から口縁にかけて片残存	内面から外周口縁にかけていいなへらミガキ、底部は直交する2方向の直線的へラケズリ、外面に墨書「山」。	長石、石英粒、鉄屑多量に含む。	良	内面黒色 外面薄い褐色	住居北コーナ一覆土中

発掘番号	遺物番号	器形	法量(cm)	遺存状態	成形・調整・その他産金観察	胎土	焼成	色調	出土位置
第22図4	3	土師器 杯	口径12.4	口縁破片 残存	ロクロ使用。内面は割線痕 が目立つ。	長石、石英、雲母 類多量を含む。	良	茶褐色	壺土中一括
第22図5	3	土師器 杯		口縁破片	摩磨。	長石、石英粒多量 を含む。	良	茶褐色	壺土中一括
第22図6	3	土師器 杯		底破片	外面ヘラケズリ。 摩磨。	長石、石英粒多量 を含む。	良	薄い茶褐色	壺土中一括
第22図7	12	土師器 甕	底径 9.2	底部一部残存	内面は横位のナデ、外面及 び内面下縁はヘラケズリ。	長石、石英、鉄屑 を含む。	良	薄い褐色	住居北コーナ ー床直面上
第22図8	7.14.26. 29.30	土師器 甕	口径32.0	口縁破片残存	内面は横位のヘラケナデ、口 縁部はココナデ、外面は横 位のヘラケズリ。	長石、石英粒、鉄 屑を含む。磨密。	良、硬質	薄い褐色 ～黒褐色	カマド上面及 びカマド両袖 外側
第22図9	9.19.24. 25.27	土師器 甕	最大径28.3	胴部片残存	内面は横位のナデ、外面は 上半が横位のヘラケズリ、 下半が斜位のヘラケズリ後、 簡単なナデ。	長石、石英、雲母 類多量を含む。	良	黒褐色	カマド上面覆 土中
第22図10	2.6.18	土師器 甕	底径10.0	底部片残存	内面は横位のヘラケナデ、外 面及び内面下縁はヘラケズ リ。	長石、石英、鉄屑 を含む。	良	黒褐色	カマド左袖及 び住居床直上
第22図11	2.3.20	土師器 甕	底径12.8	底部一部残存	内面はヘラ調整後、ナデ調 整、外面及び内面下縁は粗 いヘラケズリ。	長石、石英、雲母 類多量を含む。 鉄屑含む。	良	薄い褐色 ～褐色	カマド右袖上面

表6 022竪穴住居出土遺物観察表

発掘番号	遺物番号	器形	法量(cm)	遺存状態	成形・調整・その他産金観察	胎土	焼成	色調	出土位置
第22図1	34.58.78	土師器 杯	口径12.5 底径 7.0 器高 3.6	底部から口 縁にかけて 片欠損	ロクロ使用。 底部は回転未切り後周面を ヘラケズリ。	長石、石英、黒色 微細粒、雲母類粒 を含む。	良	薄い褐色 ～黒褐色	カマド内覆土中
第22図2	1	土師器 杯		口縁破片	内面から外面口縁にかけて ていねいなナデ、外面は手 持ちヘラケズリ。 内面は非常になめらか。	長石、石英微細粒 多量を含む。	良	褐色	壺土中一括
第22図3	1	土師器 甕	底径10.0	底部片残存	内面は器表面が割断してギ ロロしている。外面はヘ ラケズリ、底部は直線的な ヘラケズリ。	長石、石英微細粒 多量を含む。	良	内面茶褐色 外面黒褐色	壺土中一括
第22図4	1.2.3. 6.7.12. 45.55.81. 83	土師器 甕	底径 8.8	底部から胴 部にかけて 片残存	外面はヘラ調整後、ナデ調 整、外面は上半は横位のヘ ラケズリ、下半は横位のヘ ラケズリ。	長石、石英微細粒 鉄屑多量を含む。	良	茶褐色～ 黒褐色	カマド右袖を 中心に壺土中

表7 グリッド出土および表採遺物観察表

検出番号	遺物番号	器形	注冊(cm)	遺存状態	底形・裏面・その他表面観察	胎土	装成	色調	出土位置
第28図 1	1	土師器 杯	口径 14.2	底面から口 縁にかけて 1/2残存	内面から外面口縁にかけて ヘラミガキ。外面下下はヘ ラケズリ。	長石、石英粒含む が、精選されてい る。	やや不良	黒褐色～ 黒色	005
第28図 2	1	土師器 杯	口径 12.0 底径 6.3 器高 3.9	底面から口 縁にかけて 1/2残存	ロクロ使用。底面は出典典 切り後周囲をヘラケズリ。 外面に磨き。	長石、石英、雲母 類の多量を含む。	やや不良	薄い褐色	B20-77
第28図 3	1	土師器 杯	底径 6.6	底面のみ残存	ロクロ使用。底面は直線的 なヘラケズリ。外面に磨き。	長石、石英、黒色 砂粒多量を含む。	良	薄い褐色	D15 75
第28図 4	1	土師器 甕	底径 5.7	底面のみ残存	内面はヘラナア、外面・底面 ともヘラケズリ後部分的にナ デ。	褐色砂粒、雲母類 粒多量を含む。	やや不良	内面黒色 外面薄い 褐色～黒色	E12 99
第28図 5	1	土師器 杯	底径 8.2	底面から縁 部にかけて 1/2残存	内面はヨコナデ。外面はヘ ラケズリ。内・外面ともに 赤形。	長石、石英粒多量 を含む。	やや不良	赤褐色～ 黒褐色	005
第28図 6	1	土師器 杯		口縁部片	外面に磨き。	長石、石英、黒色 砂粒多量を含む。	やや不良	薄い褐色	D15-75
第28図 7	1	土師器 杯		口縁部片	外面に磨き。	長石、石英、褐色 雲砂粒多量を含む。	やや不良	薄い褐色	D16-40
第28図 8	1	土師器 甕	口径 12.0	口縁部一部 残存	内面はヘラナア。口縁部は 内面はヨコナデ後機位のヘ ラミガキ。外面は斜位のヘ ラミガキ。	赤褐色砂粒を多量 に含む。	やや不良	薄い褐色 ～黒色	E12 99
第28図 9	1	須恵器 甕		口縁部一部 残存	内面はナデ。口縁部は内外 面ともヨコナデ。外面はタ タキ目肌。	長石、石英、雲母 類の多量を含む。	良	内面赤褐色 外面黒褐色	D16 31
第28図 10	26.20	須恵器 甕		破片	内面同心円文。外面平行円 目。	白色微粒砂多量に 含む。	やや不良	灰白色	003
第28図 15	1	土師 器		口縁部1/2残存	内面はヨコナデ。口縁部は 内外面ともヨコナデ。外面 はナデでスガキが付き、も ろくなっている。	長石、石英、雲母 類の多量を含む。	良	内面薄い 褐色、外面 黒色	B19-75
第29図 18	1	黒褐色 基石	直径 2.1 厚さ 0.7	ほぼ完存		精選され砂粒少な い。	良	薄い褐色	覆土中一拵
第29図 19		燗管 (破L)	長さ 6.5	完存					表採

VI まとめ

1. 竪穴住居出土遺物と時期

今回調査した竪穴住居出土の遺物から個々の遺構の時期を捉えてみたい。ただ、小高遺跡単独での編年は無理であるので、遺跡に比較的近く、編年の比較的整った飯塚遺跡群に対照させながら、考察していきたい。

まず、対象となる遺物を出土する竪穴住居であるが、最も量的に豊富なのが018、020で、他に対象となりうるのが012、013、022の各遺構であろう。018ではロクロ未使用の杯とロクロ土師器とが供伴している。ロクロ土師器は、底部回転糸切り後周囲を回転ヘラケズリするものと、底部全体に直線的なヘラケズリ痕を残すものと大きく分れるが、立ち上がり部がやや内湾ぎみに張り出し、底径と口径の比が余り大きくない器高の深い箱型が特長である。また、土師器蓋は、かえりを持たず、天井部中央は回転ヘラケズリ痕を残している。022の遺物の特長も018とほぼ同じと考えられる。020の土師器杯は、底部を回転糸切り後周囲をヘラケズリするものと回転糸切りはなしのままのものがある。また、内面黒色処理の杯を供伴する。018に比べて後出する遺物である。013の杯は、底部回転糸切り後、周辺をヘラケズリしている。口縁端がやや膨らみ、外反するのが特長である。また、内面黒色処理の杯と碗、そして同タイプの碗を供伴している。これは020よりも更に後出する特長を持っている。住居の切り合いから012は013よりも古いことがわかっている。ただし、杯の特長は013のそれに近いのでそれほどの時期差は考えられない。したがって、以上のことから古い順に並べると次のようになる。即ち、018・022、020、012・013である。

さて、実年代であるが、018は飯塚編年ではほぼⅦ期に相当する。018は非ロクロ土師器を供伴する最終段階と考えられるので、8世紀の末から9世紀の初頭当りと考えられる。013は飯塚編年のⅩ期の資料が乏しいのははっきりせず、Ⅺ期に近いとも考えられるが、Ⅺ期にはすでに小皿が出現し、杯もすべて内面黒色処理されていること及び杯の特長からⅪ期よりも古く、Ⅸ期あるいはⅩ期の古い段階にまで遡りうるのではないかと考えられる。従って、9世紀の中葉から後葉当りと考えられる。飯塚のⅨ期にはK-14相当の灰釉陶器皿を供伴している。K-14は生産遺跡においては現段階では、9世紀の第2、第3四半期に当たる。

2. 中世以降の小高

今回の調査の中で宝篋印塔・五輪塔・板碑石材・北宋銭などの中世の遺物を出土した堀（溝）は、前述したように、台地の狭くなった部分を横切るようにつくられた堀切状の遺構と見るのが最も適当と考えられる。とすれば、城郭との関連を考えなければならないが、位置的に最も



第31圖 遺跡周辺図 (明治16年參謀本部陸軍部測量局作成)

近い城郭として、小高遺跡の乗る台地から南へ延びた尾根先端に立地する飯高城が挙げられよう。飯高城は、城主平山常時の頃（天正年間）に落城し、近世初頭の飯高檀林創設時に大幅な削平工事がなされたと推定され、現在では、土塁及び堀の一部のみを残している。城跡から石塔・板碑が出土した例としては、佐倉市臼井城跡、千葉市廿五里城跡、市原市白船城跡、市原市椎津城跡などに見られ、それぞれに城との先後・共存関係が考えられているが、遺跡について言えば、石塔類に室町時代後期に確実にはいると考えられるものが出土しているものの、飯高城とどのように関連づけるべきかはなほ資料に乏しい。ここでは、少なくとも16世紀代に当地区が墓域となっていたことを記すにとどめる。なお、小高地区の西に接する安久山円静寺境内には当地区を象徴するかのよう多数の下総型板碑が見られる。円静寺は元徳3年（1331）に千葉胤定が中山法華教寺日祐に金原郷内の田地5段と在家1宇を寄進しており、このころ日蓮宗に改宗したものと見られる。銘文から最も古いものは弘安元年（1278）銘の種子板碑がある。

小高村は寛永2年（1625）に旗本浅井氏の支配となり、明治維新まで続いた。また村の一部は寛永16年（1639）から下野鹿沼藩内田氏が領主となり、元禄10年（1697）からは旗本堀氏の支配となり、同じころ天領ともなった。八坂神社は社伝によると正長元年（1426）七月の勧進である。市内の八坂神社は明治初期にそれまでの名称を変えて称されたようで、小高村のものは江戸時代には天王様と呼ばれていた。石造の鳥居は文政2年（1819）正月に立てられた。八坂神社の安産信仰については次のような逸話がある。「飯高村郷土誌」によると、文化（1810）ごろ同村の石井縫殿之助の孫に当たる石井菊蔵というものが江戸に出て、品川塾に遊郭を開いた。菊蔵は名を春本屋桑治郎と改め、ある時、浜に上がった石神を八坂神社に奉納してから店が繁盛したという。桑治郎の墓塔は妙長寺境内にあり、実在した人物である。それよりこの神社が子授けの御利益もあると評判になり、安産信仰が盛んになったということである。

寛文10年（1670）11月以前の状況を描いたとされる「日本志東海部下総地図」（内閣文庫蔵：図説千葉県の歴史掲載）には八日市場と多古、佐倉を結ぶ現在の国道296号の業形がすでにできているのがわかるが、小高地先とそこを通過する路線については全く記載がない。最も近隣の土地の記載としては大寺がある。また、ほぼ同時期ごろの様子を描いたとされる「下総国絵図」（国立公文書館蔵：八日市場市史下巻掲載）に「北高」という地名が見える。「方田」、「坂村」の中間に位置するので現在の小高の集落を北高と呼んでいたものとおもわれる。現在の小高の集落が北から進入してくる谷に添っていることを考えるとこの集落の生活圏が北側の台地、谷津田にあったことがわかる。逆に南側の谷津に目を向けてみると、「金原」・「片子」・「飯高」・「内山」のルートが読める。「安久山」は孤立しているようにみえる。このことから、南側に面した集落間には、谷津を下り、山を上るルートがあったものと想定される。多古笹本線は現在では多古町から安久山、小高を結び、大寺、鮎木を通る幹線となっているが、小高地先のみを

考えると、江戸時代中期になってもまだ、幹線としての機能は持っていなかったか、あるいは道路自体まだ整備されていなかったのではないだろうか。

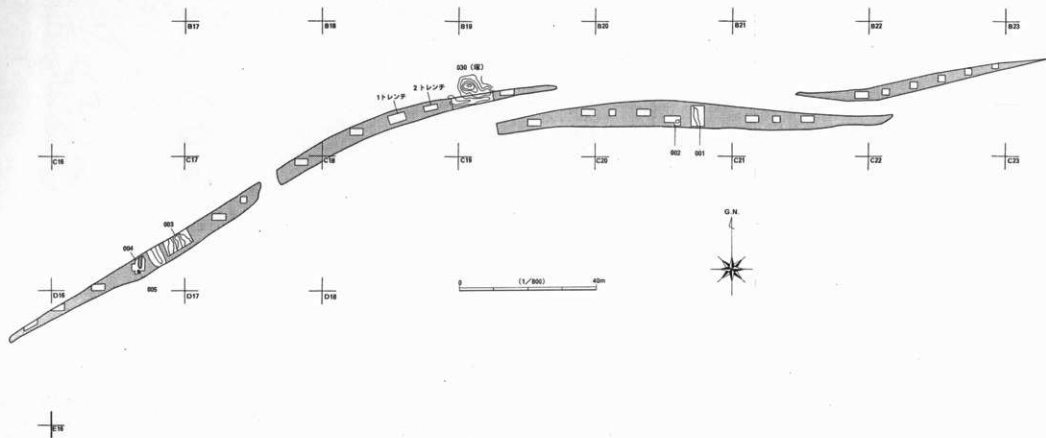
参考までに土地法典より周辺の小字名を見ると、八坂神社は字「池尻」に位置する。八坂神社の東側から神社に向かって北側の道路沿いには「大道端」という字名が見られる。また「大道端」の対面から神社西側に掛ては「宿台」という字名がある。八坂神社の旧名である「天神」という字名は現在の神社とはやや離れて北側台地縁辺に残っている。神社の移転があったのかは確認できない。「大道端」という字名から、道路が整備され幹線道路として機能していた時期のものが地名として残ったのであろう。同様に「宿台」は宿として機能していたものと考えられる。

ところが、明治20年作成の陸軍迅速図を見ると、現在の多古笹本線が出来上がっているのがわかる。従って、八坂神社の安産信仰が始まったとされる文化年間(1804~1817)ごろ当りから徐々にではあるが整備され、周辺の部落からの鳥居の寄進のあった文政年間(1818~1829)ろにはその素形が出来上がってきたのではなかろうか。そしてそれは、八坂神社の信仰のみならず、次第に現在の幹線道路としての機能を持っていたのではないだろうか。遺物から見ても、近世のものは銭貨、キセル等に見られるように比較的新しいものが多いことから裏付けられよう。

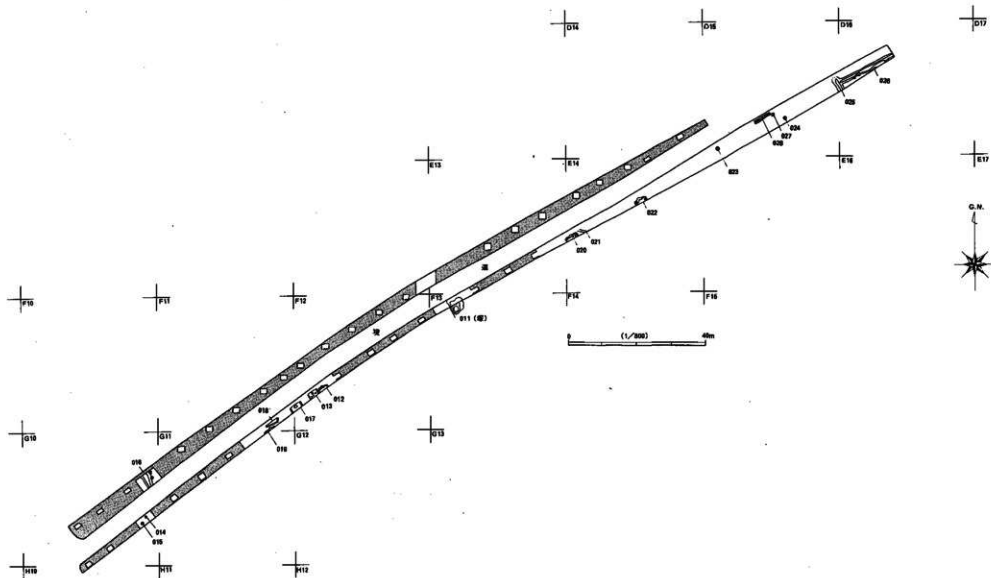
引用・参考文献

まとめるにあたって引用・参考にした文献は下記に示したとおりであるが、特に全般にわたって①、②に拠るところが大きかった。

- ① 八日市場市史 上巻 1982
- ② 八日市場市史 下巻 1987
- ③ 千葉県八日市場市版塚遺跡群発掘調査報告書 1986 八日市場土地改良事務所・八日市場市教育委員会
- ④ 房総における歴史時代土器の研究 1987 房総歴史考古学研究会
- ⑤ 千葉県中近世城跡研究調査報告書第10集—権津城跡・大堀城跡発掘調査報告— 1990 財団法人千葉県文化財センター
- ⑥ 図説千葉県の歴史 1989 河出書房新社

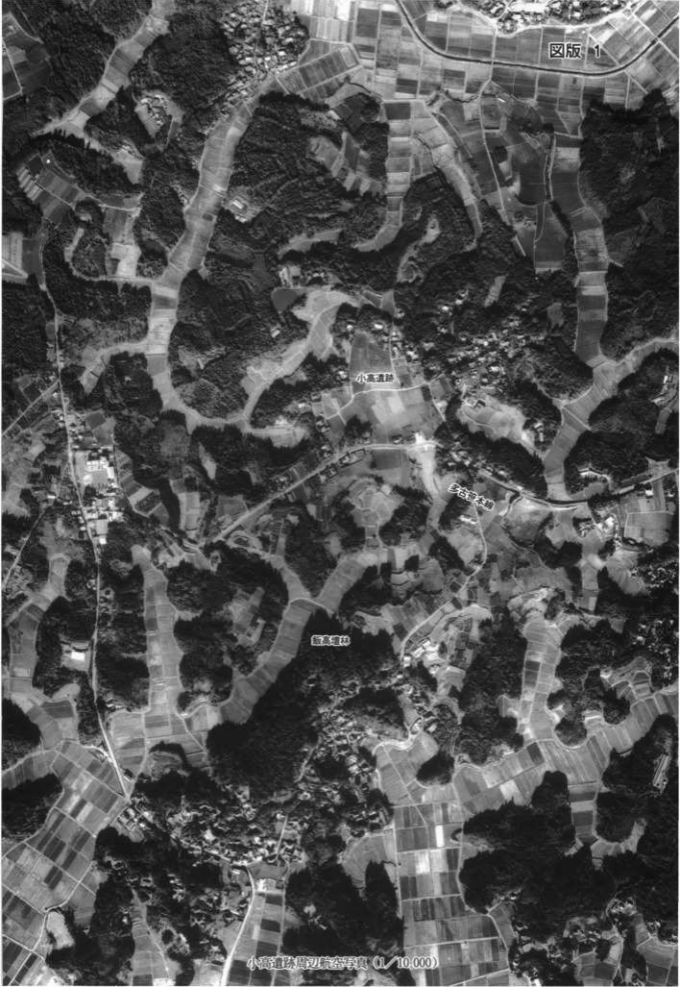


第32区 遺構配置図(1)



第33段 邊溝配置圖 (2)

写 真 图 版

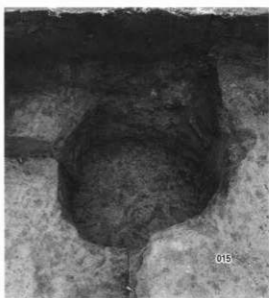




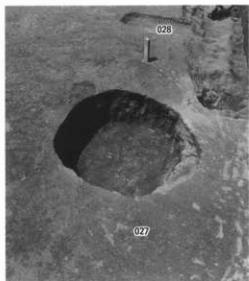
調査前



確認調査状況



014 • 015 土坑



024・027 土坑、028 溝

012・013 竪穴住居



017 竪穴住居

018・019 竪穴住居



020 竪穴住居



022 竪穴住居

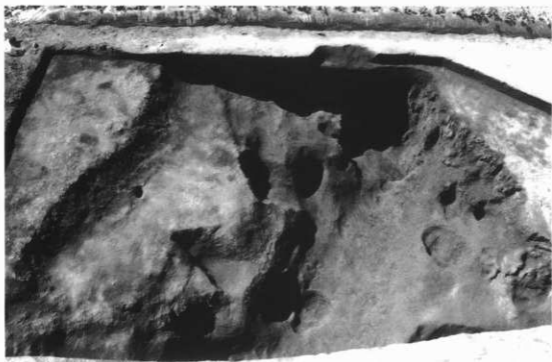


022 竪穴住居

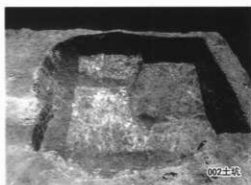
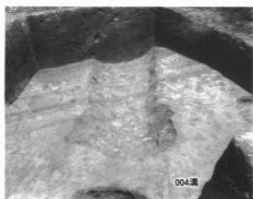




003 溝遺物出土状況



003 溝





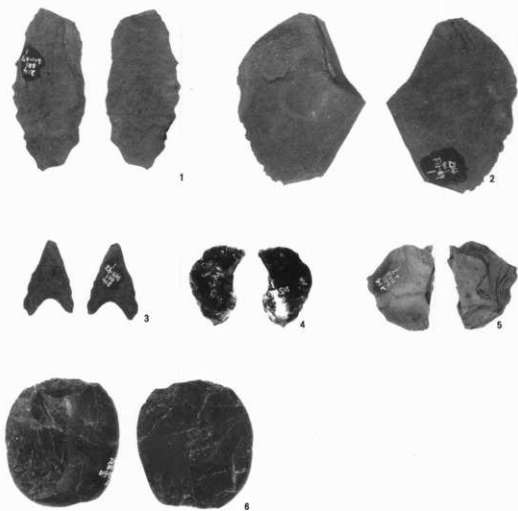
調査前



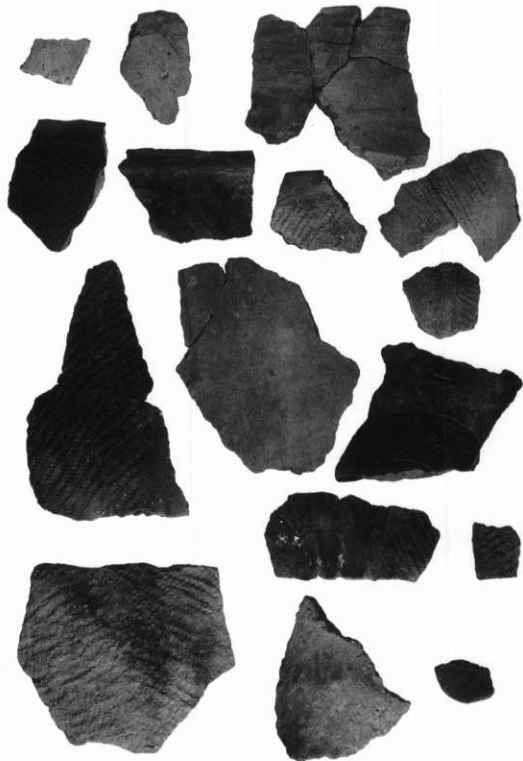
011 塚

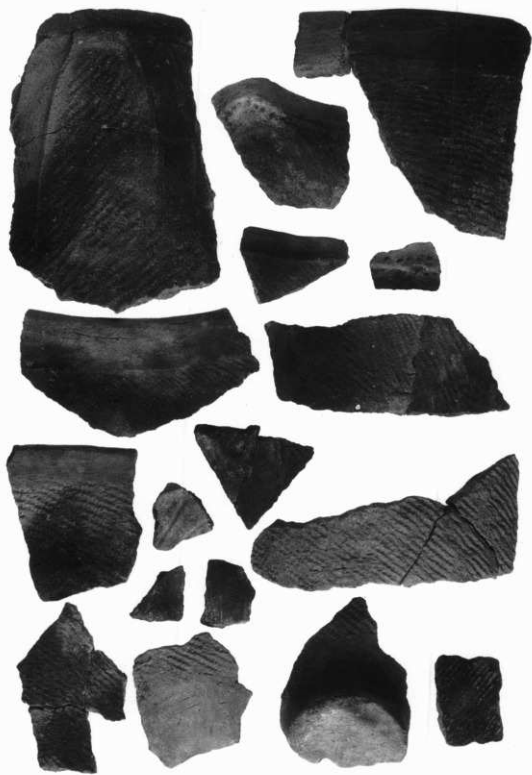


030塚

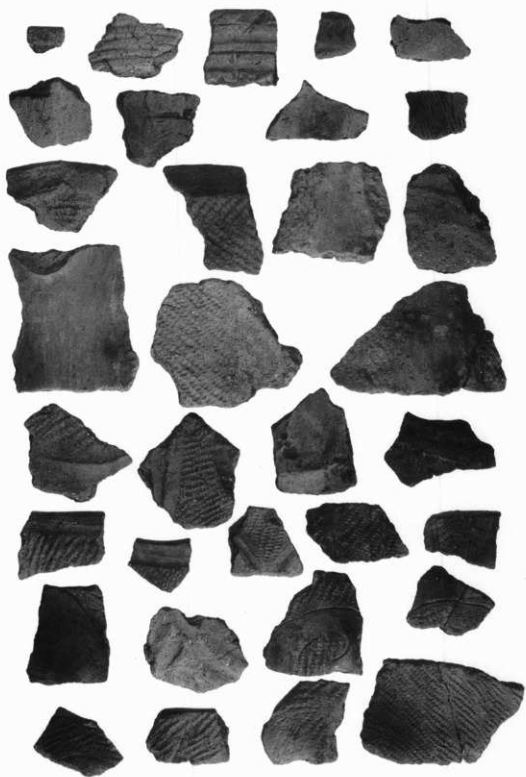


旧石器時代石器（1．2）縄文時代石器（3．4．5．6）

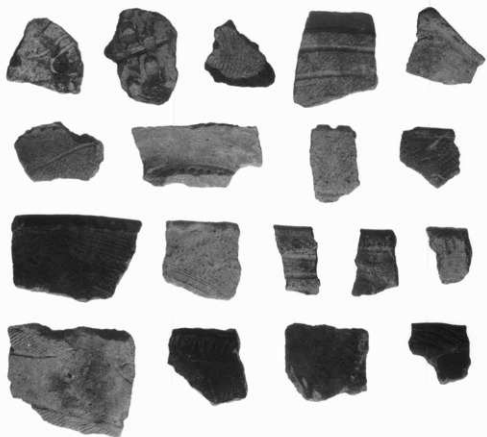




024 土坑出土土器



グリッド出土縄文土器



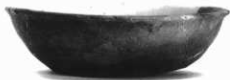
2

3

4

5

グリッド出土縄文土器・土製品



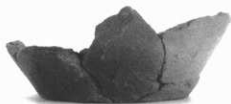
1 (012)



4 (012)



2 (012)



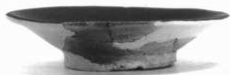
3 (012)



1 (013)



5 (012)



2 (013)



5 (012)



2 (018)



3 (018)



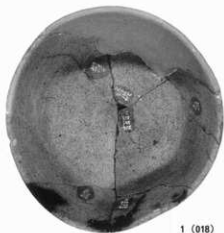
5 (018)



4 (018)



7 (018)



1 (018)



8 (018)



1 (018)



1 (020)



8 (020)



2 (020)



7 (020)



3 (020)



1 (022)



3 (020)



4 (022)



8



9



11



12



13



15



10



10'



14



2 (003)



3 (003)



1 (003)



(003)



19



18



7 (012)



(003)



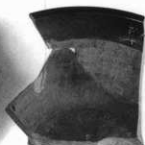
30-17



30-16



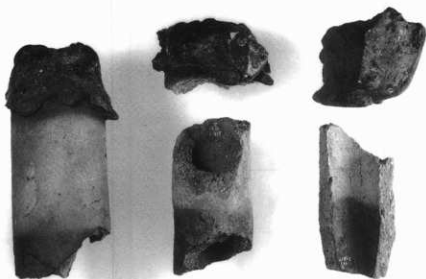
30-17'



30-16



トレンチ出土



トレンチ出土

近世以降の遺物

千葉県文化財センター調査報告第194集

八日市場市小高遺跡

—主要地方道多古笹本線事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ—

平成3年3月12日 印刷

平成3年3月20日 発行

発行 千葉県土木部
千葉県市場町1丁目1番

編集 財団法人 千葉県文化財センター
四街道市鹿渡無番地

印刷 有限会社 ミリオンタイプ印刷
千葉県新田町3丁目2番
